広島で学ぶ平和と戦争

第一中学校　一年
矢部　秀真

平成三十年三月末、小学校卒業の記念旅行として、祖父が広島へ連れて行ってくれた。祖父は爆心地からは離れていたが、当時二歳児として広島県内で被災していた。だからこそ、祖父なりの平和への願いの一歩として、原子爆弾投下によって破壊された当時の広島と、どうしたら戦争がなくなり平和な世界になるのかを学ぶ機会を、僕に与えてくれたのだと思う。まさに「百聞は一見に如かず」ということわざ通り、学校の授業で学んだ原爆被害の様子と、実際に現地で見聞きして学んだその実態は、予想以上に悲惨なもので、生涯忘れることの出来ない衝撃だった。

まずは原爆ドーム。そこに到着した途端、僕から笑顔が自然と消えた。外壁が一部残っているが、ドームの大部分は鉄骨がむき出しになっている、なんとも無残な姿の建物だった。その建物が一瞬で吹き飛ばされ、さらには沢山の人々の命までもが、一瞬で失われてしまったんだと、目を閉じて想像してみたら、恐怖で僕の全身に鳥肌が立った。

その後、平和記念公園で、各地からの祈りがこもった沢山の千羽鶴を見た時、平和への願いと希望を感じられ、その時は笑顔で平和の鐘を鳴らすことが出来た。しかし、原爆死没者慰霊碑の前に立ち、そのアーチ越しに原爆ドームを見た時には、何十万人もの命が一瞬で失われたという現実に引き戻され、僕の心は恐怖と悲しみでいっぱいになり、身体が再び震えた。

そして、最後に原爆資料館に行った時、僕は笑顔だけでなく、しばらく言葉すらも失った。遺品の数々などを目にした時、原爆がもたらす非常なむごさを心底感じた。皮膚がはがれた人々の姿写真や後遺症に苦しむ人々の様子、焼け焦げた洋服や爆風でひん曲がった三輪車などの生々しい展示物から、徐々に自分も現実的な被爆体験をしたかのような錯覚に陥ったからだ。実際の被爆者たちが負った耐えがたい身体的な火傷などの苦痛、大切な家族や友人を失った悲しみの深さは、到底計り知れないし、自分より小さい子供たちまでもがこんな経験をしたのかと思うと、なんとも言えない怒りを覚えると共に、恐怖で身体がこわばった。この想像をはるかに超える悲惨な原爆投下の実態を、僕は生涯忘れてはいけないと思った。そして、広島と犠牲者の方々に思いを馳せて、自分なりに平和とは何か、どうしたら無意味な戦争が無くなるのか考えてみた。

平和と戦争。この究極の対義語は、世界中の人々が真剣に考え、心に刻むべき言葉だと思う。何を平和と感じるのかは、人それぞれの感じ方で微妙に違うものだろう。例えば、僕にとって、家族や友人と共に笑顔で楽しく過ごせる毎日が、当たり前のようにやって来るのはとても幸せだと感じる。その幸福感があるからこそ、僕は、誰に対しても優しく接することを心がけ、穏やかな日々を過ごせる。しかし、世界各地のみならず、同じ日本国内在住でも、そのような環境が当たり

前ではない人たちも沢山いる。だが、そのような苦境でも、心にひとかけらでも善がある限り、きっと人間はいざこざを望まず、平和的会話や行動を通して、物事を色々な角度や視点から見て解決を出来るのではないかと信じたい。戦争は誰も望まない究極の暴力行為で、ましてや原子爆弾を使うことは、不幸しか生み出さない最悪の破壊行為だと、全人類が共通して認識してくれることを僕は切に願う。

テレビのニュースを見れば、至る所で民間人も巻き込まれる、思わず目をそむけたくなるような紛争やテロ行為が起きているが、このような平和ではなく、戦争寄りになってしまうまでの経緯には、お互いの心に寄り添う十分な知識や対話、そして理解しようとする思いやりがあったのだろうか。日本は唯一の原爆被爆国として、世界に対して、原爆の悲惨さの象徴である広島をもっとアピール出来ないものだろうか。そんなことを考えさせられる、七十四年前の八月六日。僕一人で今出来ることは小さなことかもしれない。でも、「ちりも積もれば山となる」というように、僕は僕に出来る小さなことをまず精一杯取り組んで、僕なりの平和をこれからも貫いて生きていきたい。

戦争を繰り返してはいけない

第一中学校　三年
栗岡加帆

戦争をしていた時代に生まれていない私は、戦争というものを知りません。しかし、学校の授業で映像や写真を見たり、小説を読んだりして、学んできました。

日本は、一九四五年まで、戦争を繰り返してきました。八月十五日、日本はポツダム宣言を受諾し、降伏しました。それまでに、沢山の人が亡くなっています。一九四五年の八月六日に広島、九日に長崎に原爆がアメリカ軍によって投下されました。原爆は辺り一面を火の海にし、一瞬にしてそこに住む人の命を奪ったのです。

国語の授業で「黒い雨」という小説を読みました。広島に原爆が落とされた後、主人公は古市の工場に向かうために電車に乗ります。その電車の中には、死児を白い布で背負う人や、顔にやけどをしている人が乗り合わせ、誰もが爆心地から逃げようとしていました。小説の中には、お父さんが子どもを見捨て、逃げる場面がありました。原爆で家が崩れ、下敷きになった子どもを父親は助けようとするものの、火の手がすぐそこまで追ってきたため、子どもを見捨て、一人で逃げてしまいました。きっと、生きることに精一杯だったのです。しかし、助けるほどの余裕がなく、見捨てなければ自分が生きてはいけないこ

の時代は、とても残酷だと思いました。
戦争が長引くにつれて、日本は苦しい戦いを強いられ、多くの人が戦場へ送り出されていきました。これまで徴兵をためらわれていた大学生なども軍隊に召集され、戦場へと向かったのです。
都市への空襲が激しくなるなど、日本は厳しい状況が続きました。都市の小学生は、空襲をさけるために、農村に集団で疎開しました。私より小さい子が親元を離れて生活するのです。戦争は、家族をはなればなれにしました。
また、食料などの生活必需品は、十分な配給が行われませんでした。次第に苦しくなる生活に、国民は一生懸命耐えました。
第二次世界大戦での死者は、世界で五千万人を超えると言われています。軍人よりも一般市民の死者の方が多かったとも言われています。犠牲になったのは何の罪もない一般市民だったのです。たとえ戦争でも、命を犠牲にしてはいけません。一人一つの尊い命です。
もし、日本が今も戦争をしていたら、今のような穏やかな生活はありません。いつ死ぬか分からない恐怖と共に毎日を過ごすのです。目の前で人が死んでいく姿を見る日もあるでしょう。家族、友達など自分の大切な人を失うこともあると思います。辛い思いをしながら戦争が終わることを願うのだろうと思います。
今、戦争をしている人たちに私は聞きたいことがあります。
「戦争して、得るものは何ですか？」
残るのは一生消えることのない深い心の傷だけです。当時もし、日本が勝利していたとしても、私は喜びの感情を持てないと思います。なぜなら、それまでに多くの命が奪われたからです。戦争で得るものは一つもないと私は思います。
そして、今年の八月十五日、日本は七十四回目の終戦記念日を迎えました。テレビや新聞では、特集が行われました。これらを見て、私は世界中を争いのない平和な世の中にしたいと思いました。実際に戦争や原爆を体験した人も高齢者になっています。私は、人が死んでいく姿も見たことがないし、本当の怖さも知りません。でも、私の下の代の子たちへ戦争というものを伝えていこうと思います。二度と戦争を繰り返さないために。

戦争を経験していない私たちができること

第二中学校　一年
柳田　妃南

私の祖母の母は大正生まれのため、戦争を経験しています。まずしい生活をしていたことや心なども豊かではなかったことを話してくれたことがありました。
戦争中は、空襲警報が鳴り、米軍の音はこわく不気味で、何人も人が亡くなっている状態で祖母の母はあまり思い出したくなさそうでした。

現在、日本は平和になり豊かな生活が当たり前になっていますが、九十七歳の祖母の母の話を聞くと毎日平和で暮らせる日々に感謝して過ごすことが大切だと改めて思いました。戦争を経験していない私は、戦争が、恐ろしく人を苦しめ、傷つけるものだということはなんとなく分かりますが、祖母の母のように経験しないと本当の恐ろしさは分からないと思います。

本や写真などで少し戦争の様子を見たことがありますが、それは何もかも焼けて無くなり、たくさんの死者を出すものでまずしさや恐ろしさ、こわさ、苦しさなどが写真からでもすごく伝わってきました。道で力つき横たわる人たち、治りょうしてもらう気力もなくそのまま亡くなってしまう人たちもいると分かり、悲しい気持ちになりました。また、黒こげになってしまった赤ちゃんを抱くお母さんの写真を見たときには、悲しみから体がとてもふるえました。手やひふがやけどでめくれてしまい、ひふがこすれないようにして歩く人々や、やけどを負った人々は、体内の水分がなくなり、水を求めて歩きまわりながら亡くなっていってしまったそうです。戦争を経験している人々は調べてみるとたくさんいて、心の傷は平和になった今も消えないそうです。

戦争から七十年以上が経ち、戦争を体験したことがない人たちが多くなりました。そのことから私は、戦争に対する意識が少しずつうすれていっていると思いました。現在の日本は平和ですが、今でも戦争や紛争をしている国はあります。アフガニスタンでは争いが一九七八年から四十年以上続いているようです。シリア内戦なども対立により紛争になり、長期化していて危険な状態が続いているようです。コンゴ内戦でも子供が戦闘への参加を強いられたりなど内戦の犠牲となっていることが分かって、胸が痛くなりました。

子供に銃を与え、子供同士が銃を向け合い殺し合わないといけません。そんな子供の心の傷はどうなってしまうのか、とても悲しく不安な気持ちになります。

忘れることのできない記憶と共に、大人になった今も生きている人たちは多く、労働のつらさや、うえて苦しむ姿を思い出したり、銃の音が今も耳に残ったりする人もいるようです。

私にとって平和とは、人々が差別なく生活でき、戦争のように争いごとがなく豊かに暮らせることだと思います。戦争は、人間が起こすことであり、欲やうらみなどから起こります。戦争のせいで多くの人が苦しみ、悲しい思いをします。また傷の手当てなどもしてもらえない人もいて新たな差別を生み、次の戦争の種になってしまいます。死を望んでいないのに命をうばわれてしまうので、戦争は二度と繰り返してはいけないと強く思いました。

戦争についてあまり情報や話を聞く機会が少ないですが、戦争について知っておくことも大切だなと思いました。核兵器などは落とすことは簡単ですが、その後の修復はとても大変で人々が生活できるようになるまでには何年もかかります。

七十年以上前に起こった出来事、今でも続く出来事から目をそらさずに受け継いでいかなければいけない使命が私たちにはあるはずです。平和をつくることは大変ですが、一人一人が戦争についての悲しみや平和の大切さを考えることが大切ではないかと私は思います。

～平和を願って～

第三中学校　二年
村山　心々菜

去年の三月。私は沖縄の平和祈念公園を訪れ、戦争で犠牲になった人々が書かれた石碑を見た。そこには数えきれないほどの石碑が並んでいて私は唖然とした。

今まで戦争と言われても、この平和な日本が戦争していたとはどうしても思えなかった。テレビでも原爆が落とされた広島の原爆ドームの映像や、長崎で原爆の爆風により吹き飛ばされた建物などがあったが、日本ではなく違う国の映像を見ているかのようで、とても不思議な感じがした。

太平洋戦争末期の一九四四年秋に、人間自身が敵に体当たりする「特攻」に突き進み、沖縄戦が始まると、陸海軍合わせて五千八百人もの人々が命を落とし、兵士のほとんどが十～二十代の若者だったという。私はそれを聞いて、心が張りさけそうな気持ちだった。当時の十～二十代は、これからの日本を支えていく人々だから、とても残念な気持ちになった。

当時は地下壕が作られていたが、地面はぬかるんでいたらしく、この中の生活は苦痛だったと思う。ここでは約一万人が仕事をする予定だったらしい。私がもし、この場にいたら、耐えるのは難しいと思うし、地面がぬかるんでいたら座ることもできないし、寝ることもできないと不便さを感じた。そして、毎日不安と隣り合わせで生きてきた人々は、精神的にも、肉体的にも疲れ果てただろう。加えて、日に日に増え続ける死者を止めることはできないかという思いにもなったのではないか。そして、そんな状況に置かれてもなお、日本は戦いに勝っていると言い続けた。戦場に向かう兵士のほとんどが本当のことを知らずに死んでいったということを考えると、ぞっとした。

今では、地下壕や秘密兵器の研究所など、戦争遺跡から歴史を学ぶことが多い。沼津でもいくつかの戦争遺跡があることを知り身近にも残っていることに驚いた。

私が考える平和とは、戦いや争いがなく、みんな平等に生きるということだと思う。平和への想いや願いが強い日本だからこそ、これからも、平和な世の中を築いていけるのではないだろうか。私は、日本に生まれて本当によかったと心から思う。兵器という恐ろしい物を使った戦いはなく平和な毎日を過ごすことができるのは、とても幸せなことだと感じた。

世界では、たくさんの国々が戦争を行っている。毎日生きることに必死で、苦しい思いをしている人もたくさんいる。戦争で家族をなくして悲しんでいる人だってたくさんいる。しかし、一人一人が平和について考えていけば、世界がもっと平和に近づくことができると思う。私たち日本人は、毎日安心して暮らせている。学校から帰り、温かい家族が待っている毎日が習慣になっている。そして、改めて日本は平和な国だなと感じた。

平和とは

第三中学校　二年
米野　ひま莉

私は毎日、当たり前のようにご飯を食べて学校に行っています。しかし世の中には、私たちのような当たり前の生活ができていない人がたくさんいます。私が家族や友達と笑い転げている時も世界のどこかで戦争が起こってたくさんの人たちが犠牲になっているのです。犠牲になってしまった方たちのことを思うと、本当に胸が締めつけられます。

私は去年の夏、長崎の原爆資料館に行きました。様々な展示があり、戦争を経験したことがなく、平和な日本に住んでいる私にとって、衝撃的なものが多かったです。改めて、戦争の恐ろしさ、悲惨さが身に染みて分かりました。戦争は人の命を奪い、体を傷つけ、心も傷つけます。戦争をしてプラスになることなどないのに、どうして戦争をするのか、人は話すことができるのに、どうして戦いをするのか、戦いをすることによって解決することができるのか、私は疑問に思います。戦争によって失われるものは、人の命だけではありません。植物や動物、美しい自然だって失われてしまいます。人には感情があり、誰だって自分の考えを持っているから、意見の食い違いがあることは当然のことで、仕方のないことです。しかし、それを理解し相手の考えも尊重して相手を思いやる気持ちがあれば、戦争をすることなどないと思います。戦争をすること、私には理解できないし、理解してはいけないことだと思います。

原爆資料館から帰った私は全然眠りにつくことができませんでした。戦争と平和という文字が頭から離れず、平和とは何かずっと考えていました。私は「平和」と聞くと、戦争が起きていない生活が、まず一番に思い浮かびます。その他にも、毎日笑顔で安心して暮らせること、差別のない世界、たくさんのことが思い浮かびます。平和とは何か、人によって考えは違うけれど、私は世界中の人たちが何にも怯えることなく、安心して暮らせることが平和だと考えました。今の世界は平和であるといえるのか、差別があり毎日戦争により犠牲になっている人たちがいるこの世界を、私は平和であるとは思えません。たくさん改善することがあると思います。一秒でも早く、たくさんの人たちが安心して暮らせる世界を、私たちが創っていかなければなりません。

平和な世界を創りあげるために私たちは、過去の戦争による被害をこれからの世界を生きる人たちに伝えていくことが大切だと考えました。戦争はいけないこと、日本のこの悲惨な歴史を忘れてはいけないと、しっかりと伝えていかなければなりません。そして今、日本で当たり前のような生活ができていること、それは当たり前ではない、ということもたくさんの人に伝えていきたいです。

日本では毎日たくさんの残飯が出ています。飢えでたくさんの人が亡くなっているのに、日本ではたくさんの食料を余らせ、捨ててしまっている。こんな現状はあってはならないし、今後、改善していかなけ

ればならない課題の一つだと思います。蛇口をひねれば水が出て、スイッチを押せば電気がつく。戦争もない、今の平和な日本で暮らしている私は本当に恵まれているなあと思いました。当たり前のことは当たり前ではない、今日もたくさんの人たちが犠牲になってしまっているということを忘れずに、今後生活していきたいです。そして、今安心して暮らせていることに対して、感謝する気持ちと、人を思いやる気持ちも絶対に忘れてはいけないと思います。一秒でも早く、世界中から笑顔の数が増えるために、私たちには何ができるのか、常に自分に問いかけて、これから前に進んでいきたいです。

あの日と同じ　青い空

第四中学校　三年
髙木　咲来

一瞬
日本は静まりかえる
どんなに小さな子も
何かを察したように
大人たちの顔を見上げ
静かになる
これは戦没者の冥福を祈る

無くてはならない
大切な時間だ
それと同時に
戦争は二度としないと
心に刻む時間でもある

今ここにいる
私と何が違うのだろう
全く同じ人間なのに
あのとき
あの場所にいたのは
もしかしたら
私だったかもしれない
どうすることもできない
大きな力で
かき消されてしまった
彼らの声を
心で聴いて
戦争はいけないことなんだと
多くの人に伝えていくのが
私たちの役目だと思う
耳に音が戻ってきた
顔を上げ

ふと上を見ると
あの日と同じ
青い空が広がっていた

令和に生きる

第四中学校　三年
髙田琉生

「一週間以内に、君のペットを殺せ。」
と命令されたらどうしますか？
たとえ、
「万一に備えて、君のペットが逃げ出し、近所の人たちが危険にさらされるのを避けるためだ。」
そう言われても、僕は素直に命令には従えないと思います。悩みに悩みぬき、ペットを連れて逃げ出すかもしれません。

戦争中の昭和十八年八月。
「一ケ月以内に象と猛獣類を殺せ。」
と、動物園に命令が下されました。空襲で猛獣が逃げたら人間が危険だからという理由からです。可愛がって世話をしてきた動物たちを自分の手で殺さなければならないなんて動物園の人たちは、とても悩み、苦しみぬいたことだろうと思います。何とか生かす方法はないかと、田舎の動物園に疎開させる意見も許されなかったようです。眠っていても、動物たちが夢に出てきて熟睡できない日が続き、一ケ月で体重が八キロ減るほどだったと言われています。愛情をもって育て、動物たちと信頼関係で結ばれていたから尚更苦しく悲しかっただろうと思います。

結局、上野動物園では、何の罪もない象、ライオン、熊など二十七頭が、毒や首を絞められたり、絶食などの方法により殺されました。

戦争は人間によって起こされます。置かれている環境・思想・教育・持っている資源の有無で、自分たちに都合の良い選択をしてしまうことがあります。

そして、戦争は人間の思考を間違った方向に向かわせることが多いようです。その結果、人間だけでなく、動物もまた不幸にすることが分かります。

今、動物園は、人の歓声や笑い声であふれ、動物たちも穏やかに生活しているように感じます。動物園があること。そこに動物がいること。当たり前のことが当たり前であること。それが「平和」だと思います。

鼻を上手に使いりんごを食べている象や威厳のある態度でこちらを見ているライオン、水の中に飛び込み、大きな肉球をガラス越しに見せてくれる白熊などを見ていると、二度と罪のない動物を殺さなければならないなどということがあってはならないと改めて思います。

戦争の悲惨さ、苦しさ、やり場のない怒りを実際に体験していない僕にとって、戦争は授業、本、映画、ドラマなどを通してしか知り得

ませんが、空襲で燃え逃げまどう人々の様子よりも僕と同世代の男の子が、自分の命を国の為に捧げることに対して誇りに思っているのを知ったときにとても胸が苦しくなりました。

平和な時代に生きている僕にとって「戦争」という事実は、決して忘れてはいけないことです。

そして、この平和な日々が続くように努力することが、僕たちに与えられた「使命」であり「責任」ではないでしょうか。

なぜなら、戦争を起こすのが人間なら、平和な世界を続けられるのも人間だと思うからです。

消えた八月

第四中学校　三年
土屋　彩

空は青く澄んでいて、セミたちの大合唱がたえまなく聞こえる今日は、八月六日。今日は原爆の日。今から七十四年前の今日、広島市はアメリカによって原子爆弾を落とされ、何万にものぼる人々の命が熱い光の中で一瞬にして消えました。

「黙祷」と日本中の人々が目を閉じ、被爆者たちに静かに祈りを捧げました。私たちの間を重い沈黙した時が静かに流れました。テレビをつけると、どの局でも原爆の話題で持ちきりで七十四年前の惨劇を伝えようとしていました。私は次々と映しだされる変わり果てた街の様子を見て、広島から平和と美しい夏を奪った原爆と現代に生きる私たちができることを考えました。

以前、私はテレビで「高校生平和大使」について放送されているものを見ました。男女数名で活動していて、彼らは核兵器廃絶を訴え、他国で原爆のことを写真と共に英語で話していました。特に今年の六月にバチカンのサンピエトロ広場でローマ法王フランシスコの一般謁見に参列し、ローマ法王に直接廃絶への思いを伝えた高校生は十六歳。今の私とたった一歳しか違わないのに世界を通して廃絶を訴えて活動をしている姿を見て、私は、ただただ、すごいと思うほかありませんでした。

彼らが持っていた写真、それは「焼き場に立つ少年」。今の私より年下の一人の男の子が荒れ果てた戦場に亡くなっている弟を背負って立っている写真です。この写真を撮影したジョー・オダネルは弟を燃やしていく夕日のような炎を前に少年が唇を強く噛み締め、血をにじませていたことを文章に残していました。私はこの事実を知って、この少年の力強さ、更には、大きな責任感を持っていることに敬意を抱きました。同時にこの少年が背負っている幼子（おさなご）も含めた、たくさんの人々の命を奪った戦争を、原爆を恨みました。原爆は本当に残酷で冷酷で恐ろしい武器だと改めて感じました。

私は、戦争は二度と起こしてはいけないし、原爆は、どんな理由があろうとも二度と使用してはいけないものだと思います。現代に生きる私たちができることは、あの高校生大使のように同じことを二度と

繰り返さないように後世の人に戦争や原爆の悲惨さや恐ろしさを語り継いで知ってもらい、こんなことを二度と起こしてはいけないと分かってもらうことだと思います。高校生大使の一人は、

「きれいごとではなく、私たちは本当に真面目に戦争や原爆というものがあったことについて考えなければならない。」

と言いました。そしてローマ法王は、

「あのように残酷な過去があったことを忘れてはいけない。」

と言いました。私たちは、原爆の事実を忘れずに後世に語り継いで生きていくのです。

空は青く澄んでいて、セミたちの大合唱がたえまなく聞こえる今日は八月六日、原爆の日。今から七十四年前に起こった悲劇が繰り返されないこと、この何気ない平和な日々が奪われないことを私は強く願います。

世界に平和が訪れる日はいつなのか

第四中学校　三年
矢田　もか

私のふるさと沼津は、昭和六十二年三月二十日に「核兵器廃絶平和都市宣言」を行った。そこから三十二年が経過しようとしている今も、世界のどこかで戦争が続いている。

日本国民は七十四年前の八月十五日正午、天皇からラジオで終戦を告げられた。母方の祖父は昭和九年生まれなので、十一歳で終戦を迎えた。終戦の詔勅（ミコトノリ）を家族や近所の人と一緒に聞いたそうだ。その時はとにかく戦争が終わってほっとしたことを覚えている、と言っていた。

伊東の山の中で食べ物が豊富に採れるので、戦時中でも食料には困らなかったのだろうと思っていたが、そうではなかったらしい。作物や鶏を盗まれたりすることは多々あったそうだ。祖父の父は結核を患っていたため、戦地に行くことはなかったそうだが、集落の墓地の最前列には戦地で亡くなった方々の墓石が十二基並んでいる。日本が必死に戦っていたのが分かった。

父方の曾祖母は今年で百二歳だ。夫（曾祖父）は戦争で怪我を負い、祖母が五歳のときに亡くなったそうだ。現在は当たり前のように母親がいて、父親がいて、兄弟がいるが、当時は幼くして父親を失うことがあるのだと分かり、なんだか悲しくなった。

毎年この時期になると広島や沖縄などの衝撃的な映像をテレビでよく見かけるが、遠い出来事のように思っていた。しかし、中学三年生になって戦争を身近に感じるようになった。国語では井伏鱒二の「黒い雨」、英語では「かわいそうなゾウ」、音楽では文化祭で披露する「木琴」という曲を歌ったからだ。「木琴」は戦争によって命を落とした妹に対する兄の心情が描かれている。最愛の妹と、妹が大切にしていた木琴を奪ってしまった戦争に対する兄の憎しみ、怒り、無念さが表現されている。また、何の罪もない者の幸せや命まで奪う戦争の残酷さ

が伝わってくる。私に妹はいないが、兄や姉がいる。もし私がこの時代に生まれて戦争によって兄や姉を失ったらきっとこの兄と同じ気持ちになるだろう。曲中で一番強弱が激しい、「あんなに嫌がっていた戦争が、戦争が、戦争が、戦争が、戦争が、お前と木琴を焼いてしまった」というところは聴いている全ての人の心に突き刺さる表現ではないか。

「平和」という言葉は誰しもが聞いたことがあるはずだ。何が平和というのかは人によって基準が違うだろう。しかし、戦争がなくならない限りは平和であるとは誰も言わないはずだ。多くの人々が平和を願う一方で、未だに世界のどこかで戦争が続いている状態である。戦争で失ったものの量は計り知れない。得たものよりも失ったものの方が圧倒的に多いのだ。私は一刻も早く平和な世界になってほしい。世界に平和が訪れる日はいつなのか。

終戦を迎えて七十四年が経った今、私たちは何をすべきなのか。それは、戦争の恐ろしさを次世代に伝えることだと私は考える。二度と同じ過ちを繰り返さないために。

世界に平和が訪れなくても、それに限りなく近い状態でいられるように私は訴え続ける。

平和について

第五中学校　一年
菊地春香

終戦から七十四年。

私の祖父はそのころ小学一年で戦争を体験した。

今の若い人たちは戦争のことをよく知らないと思うし、私もよく知らないので一番身近な祖父に聞いてみることにした。

私と同じ沼津市立第五小学校に通っていた祖父は六年生をリーダーに集団行動をしていた。登下校中に空襲警報のサイレンが鳴るとあわてて近くの防空ごうへかけこんだ、こわい記憶があるそうだ。

そしてインターネットでも調べてみると、沼津市は軍需工場が集中していたためにアメリカ軍から集中攻撃を受けたらしい。

総務省の空襲状況によると私の住んでいるこの沼津市平町と山王前へは昭和二十年五月十七日、五月二十八日に空爆、七月十七日未明の「沼津大空襲」では七十機を超える数の戦闘機から九千発以上の焼い弾が投下され、千本浜海岸へ逃げた人たちは機銃掃射に狙われ命を落としたそうだ。結局沼津市市街地面積の約九十パーセントを焼失されたその被害で二百七十四人の死者、五百五人の重軽傷者が出たと書かれていた。通っていた第五小もやはり焼けていたようだ。

自分が住んでいるところに、昔はおそろしく悲しいことがおきてい

たことを初めて知り衝撃を受けた。

戦争はテレビや本でしか出てこない遠い昔のことだと思っていたのに意外と身近に起こっていて、そんなに昔のことではないと実感した。

今はふつうにみんなが平和に生活できているのに昔の人は私と同じ人間なのに生きる時代がちがうだけでこんなに生活がちがって、すごくかわいそうだなと思った。

こんな悲しいことが、もうこれ以上起きないように自分たちの地域に起きたこの悲しさをみんなにもっと知ってもらったほうがいいと思った。

そしてもっといろいろな人から話を聞いてみたい。友達に教えてあげたい。みんなで戦争のことについて考えて、話し合ってみたい。

これからも、この平和な生活がずっとこのまま続けられるように私たちでできることからやっていきたい。私はこの平和が続くよう心から願っている。

戦争～そして平和を考える～

第五中学校　一年

藤澤　美咲

私は、戦争と聞いても小さい時はピンとこなかった。学校の授業やテレビの特集を見ても、遠い昔の話でばくぜんと「怖いな」と思うくらいだった。

しかし、一昨年、私は夏休みの自由研究で自分の住む町「沼津市」の戦争の歴史について調べ、史跡を巡ったり、いろいろな人の話を伺って、戦争というものがどういうものだったのか、詳しく知ることが出来た。

沼津市は八回もの空襲を受けていた。中でも七回目の空襲は大規模なもので「沼津大空襲」と呼ばれ、市街地の九割も焼失してしまった。

一夜にして焼け野原になってしまった町。なぜ空襲を受けなければならなかったのか。私は疑問に思い、学芸員さんに質問すると、その理由として考えられているのが、沼津が都市であったこと。もう一つは、米軍の飛行機基地に帰る際に残っていた爆弾が重いから、沼津上空で捨てていったと言うのだ。私はそれを聞き、そんなことで多くの人が亡くなり、傷ついたのかと思うと、いきどおりを感じた。

そして、その空襲を実際に体験した方にお会いし、話を聞くことが出来た。

当時小学一年生。夜中に空襲の知らせを聞き、家にいたら危ないということで逃げだした。たくさんのB29（アメリカの戦闘機）が飛んできて、焼夷弾をバラバラ落としていき、空を真っ赤に染め上げ、辺りは火の海に。焼夷弾は落ちると破片が飛び散り、逃げまどう人々に襲いかかった。お話を伺った方は、右足に刺さってしまい、足を切断しなければならなくなった。話を終えると、ズボンの裾を上げ義足をつけている右足を見せてくれた。

私はものすごく胸が苦しくなった。戦争の話をするのは辛い記憶を

思い出すこと。しかし、私たち、戦争を知らない者に戦争がどのようなものだったのか。どんなに悲惨なものだったのかを伝えてくれた。そして、お話の最後、「命を大切に、世界を平和に」と、おっしゃっていた。とても重い言葉だと思う。

今、私たちは何不自由なく暮らすことが出来ている。安心して寝ることが出来、おいしい物を食べ、毎日お風呂に入り、学校で学べる。それは、今の日本が平和だからにほかならない。当時の人々は自分の気持ちを自由に発することも出来ず、命さえ自分のものではなかった。戦争は悲しみ、苦しみ、憎しみしか生まない。

日本は今、憲法で「戦争はしない」と言っている。どの国も「戦争はしない」と言うようになり、世界中から幸せがあふれるようになれば良いと思う。「命を大切に、世界を平和に」毎年八月十五日の終戦記念日には、この言葉を胸に、黙祷したいと思う。

繋げる

第五中学校　二年
石田太一

寒い寒いシベリアに　とらわれた曽祖父
もう何年経っただろう
手がとまる

遠い空を見るとき
思い出すのは
妻とまだ幼かった娘
ほほに涙がつたう
思いを消すように
厳しい作業に
また　もどる

暗い暗い海の中　放り出された曽祖父
もうどのくらい経ったのだろう
まわりを見ると
遠い彼方に　船が燃える
頭に浮かぶ　必死に探す
戦友の命
ほほに涙がつたう
思いを打ち消し
暗い暗い海の中
無我夢中で泳ぐ

遠い遠い二人の曽祖父の記憶
もうこの世にはいない二人
遠い空を見るとき
遠い海を見るとき

思いはつながっている
時をこえて
二人の曽祖父と

暑い暑い日差しの中
あれから続いている
平和な時間

仰げばそこに　青い青い空
遠い彼方に　　青い青い海

平和を願う　　皆の想い
虹の先にある　皆の未来

僕は
繋げる

平和って何だろう

片浜中学校　一年
長倉健太

夏休み中のテレビのニュースでは、北朝鮮のミサイル発射問題やアメリカと中国の貿易まさつ、中東でのテロ、そして連日のように繰り返される日本と韓国の対立問題など、世界の国々の紛争が毎日報道されていますが、僕自身は何不自由なく生活できているのでどこか他人事のように考えていました。

一方で相手の国が悪いとお互いの主張を繰り返し、韓国国内での日本製品不買運動や、日本への旅行をやめるなどのニュースを見ていると、となりの国同士、同じ人間同士なのに、「何故仲良くできないんだろう？」「韓国人の人々は皆日本人がきらいなのだろうか」とも思いました。しかしある出来事をきっかけにそれは違うということに気付きました。

夏休みに家族旅行に行った時のことです。浅草の浅草寺の境内で韓国人女性が、「私は韓国人です、ハグしませんか？」とのプラカードを持ってフリーハグ運動をやっていました。

前にインターネットでフリーハグしている男性の映像を見たことがありましたが、この状況でこの行動ができる韓国人女性にビックリしました。そしてとても勇気のいる行動だと思いました。

僕は毎日のニュースで日本人と韓国人は仲が悪いと思い込んでいたので理解するまでに少しいろいろなことを考えてしまいました。僕ははずかしくてハグすることはできなかったけれど、次々と日本の人たちとハグする姿を見たときに、国同士は仲が悪くても日本人も韓国人も仲良くしたい気持ちがあるのだと思い、とてもうれしくなりました。またこの女性がどんな人か気になり、調べてみることにしました。

関東にはいくつものコリアタウンという所があり浅草や上野、三河島などの近くには在日韓国人が多数、日本人と変わらず日常生活をしていることが分かりました。

今は国同士が対立していますが、人と人は、お互いを理解し合い仲良くしたいという気持ちがあるということが分かったので、早く元通りの日本と韓国の関係にもどると良いなと思いました。

今の僕の生活は、学校で勉強したり、家でゲームや食事をしたりしています。それが平和でしょうか。「平和とは？」よく耳にする言葉だけれど、実際どのようなことが平和なのか気になり、辞書で調べてみました。

一、戦争や紛争がなく世の中がおだやかな状態になること。またそのさま。

二、心配やもめごとがなくおだやかなこと。またそのさま。

と書いてありました。

日本では、第二次世界大戦以降七十年以上戦争のないおだやかな日々が続いているけれど、他の国では戦争やテロなどさまざまな事件が毎日のように起き、たくさんの罪のない人々が死んでいます。そんな記事を見ると（なぜ人はそんなことをするのだろう？）と僕は思います。仲良くしたい、相手を思いやろう、そんな気持ちの人が少しずつでも増えていけば、今の世の中から戦争やテロが減り、平和でおだやかな状態が続くのではないかと思います。

日本も一日でも早く韓国や北朝鮮との争いが解決して仲の良い国同士になり、世界中が戦争のない平和な世界になったらいいなと思っています。

見てください

片浜中学校　三年
中根洸輔

夏休みに横浜へ行った時、偶然通り掛かった場所で「原爆と人間展」が開催されていました。そこには被爆当時の絵や写真、被爆者が着ていた血まみれの服などが展示されていました。その中で最も衝撃を受けたのは、タイトルに「見てください」と書かれた炭のように真っ黒こげになった少年の写真でした。テレビなどでも本当の死体を見たことがなかった僕は、真夏なのに背筋が凍り付きました。誰もが目を覆いたくなるような写真でしたが、あえて「見てください」と書かれたパネルは「目を背けずにありのままの残酷な姿をずっと記憶に残してほしい」という願いがあったのでしょう。

第二次世界大戦末期の一九四五年、日本はアメリカやイギリスなどとの戦争で敗戦間際の状態に追い込まれていました。アメリカは七月に初の原爆実験に成功し、当時のトルーマン大統領は「原爆を投下すれば、ロシアがやってくる前に日本はお手上げだ」と喜び、八月六日に広島、九日に長崎に原爆を投下しました。日本への原爆投下は、大戦後のロシアとの勢力争いに備えてアメリカのい力を見せつけることが目的だったようです。そのために日本で犠牲となった二十万人もの被爆者の命って何だったのだろう。あの少年のように黒こげになった様子を見て、アメリカ人はどう感じたのだろう。そんな悔しい思いでいっぱいになりました。

また、アメリカで大ヒットし、日本でも放映されている「ディス・イズ・アス」という連続ドラマの中で「ナガサキ」という単語が「破滅する」「つぶす」という意味の動詞として使われていたとニュースで報道されていました。その番組の中でアメリカ人にインタビューしている場面がありました。その中で、

「日本人が嫌悪感を持っているなら、それを主張すべき。」

と言っていた女性がいました。僕はそれを聞いた時、原爆を投下したアメリカの人に罪悪感はないのかとがっかりしました。僕自身も実際に戦争を経験したわけではありませんが、同じ日本人である僕は、大変な出来事であったことはわかります。しかし原爆を投下した側の国ではどのように伝えられてきたのでしょうか。日本での悲劇は世界の歴史のほんの一部でしかないのでしょうか。原爆投下から七十四年経った今、戦争の悲しみを知る日本人も少なくなっています。どのような辛い出来事も、時間の経過と共に忘れられてしまうことも事実だと思います。横浜での展示で配布されていた案内は日本語で書かれている面の裏側には英語で書かれていました。それは日本人だけではなく、世界中に原爆の恐ろしさを知ってほしいという思いがあるからだと思います。

地球上には今も約一万五千発もの核兵器があるそうです。また、二千回以上の核実験も行われているそうです。核兵器国とされるアメリカ、ロシア、イギリス、フランス、中国だけでなく、パキスタン、インド、イスラエル、北朝鮮という多くの国で保有しているのです。北朝鮮も頻繁に弾道ミサイルを発射したり、最近では日本と韓国の関係も怪しくなっています。戦争の痛みを知らない国々は、原爆を投下することや、そのためにたくさんの人々の命を奪い、地球の環境を壊すことを何とも思っていないのでしょうか。地球の環境は年々変化し、異常気象や大地震、津波などがいつどこで発生するかもわかりません。もし、それらの核兵器が存在する場所で大地震や大火災が起こったら……。想像しただけでぞっとします。僕は核兵器のない世界の実現を願い、「ヒバクシャ国際署名」に署名して横浜の会場を後にしました。

その日に僕が考えたことは色々ありました。現代人は知らない戦争の恐ろしさや、どうしたら世界に平和な日がくるのかなど考えました。戦いがなく人と人が力を合わせて生きる時代は遠いかもしれませんが、戦争で罪がないのに亡くなった人たちが残した物を無駄にはしたくはありません。まず自分だけが生きればいい、他人はどうでもいいなんて考えをやめてどうしたら皆で生きていけるかを考えればいいと思う

のです。もちろん僕が願ったところで、世界は何も変わらないかもしれませんが、平和を望む人が増えればほんの少しでも戦いがなくなるかもしれません。そして僕は平和な世の中がいつかはくると信じています。

献花によって変わった気持ち

金岡中学校　一年
齋藤　洸太

「平和」

この言葉は、一年前までの僕にとって、とても漠然としたものでした。戦争がない世界。それは、犯罪のない世の中。毎日変わることなく学校に行くことができ、ご飯も食べられる。そのくらいのイメージしか持っていませんでした。

そんな僕が、僕なりに平和について深く考えるようになったのは、昨年の夏に祖父から頼まれて参加した行事がきっかけでした。その行事とは、八月十五日に沼津市民文化センターで行われた「戦没者を追悼し平和を祈念する日」の式典でした。祖父のおじが戦争で亡くなっていて、僕は遺族の代表として献花を頼まれたのです。正直、違和感を覚えました。なぜなら、僕はその人を知らないし、葬式も出ていない。悲しいと思ったことがない。それなのに「遺族」と呼ばれることを、不思議に思ったのです。

そんな気持ちで会場に入った僕でしたが、一歩入った瞬間、立ちすくんでしまいました。黒服を着たたくさんの人たち。お年寄りが多く、同じ学校の同級生を見つけることはできませんでした。式典が始まる前から会場にいる人たちの会話は少なく、厳かな雰囲気に包まれていました。

献花用の花束を持った僕に、一人のおじいさんが話しかけてきました。

「来てくれて、ありがとうね。」

僕は、はっとしました。祖父に「遺族の代表として」と頼まれたことを思い出しました。このおじいさんも、周りに座っている方々も同じ「遺族」だということに気づいたのです。

式典が始まると、お年寄りのすすり泣く声も聞こえてきました。戦争から七十年以上経ってもなお、こんなにもたくさん悲しむ人たちがいました。この人たちはみんな、過去の戦争を悔やみ続け、これからの平和を深く深く祈っている。僕はこの目で、この肌で、ひしひしと平和への想いを感じ、花束を持つ手が震えてきました。

献花の時が来ました。

「昭和十二年九月三十日。中国にて二十三才で戦没されました、故・齋藤賢一様のおいの孫にあたります、金岡小学校六年、齋藤洸太さんです。」

僕は、前に進みました。遺族の一人として、祖父のおじさんのために、そしてこの会場にいる皆さんの大切な人のために、ご冥福とこれ

からの平和を、心から祈りました。そのときに祈った平和は、それまでの漠然としたものではありません。「与えられた命をお互いに大切にできますように。命をうばう原因となる戦争やテロ、犯罪などがなくなりますように。大切な人を亡くして悲しむ人が増えませんように。世界中の人が、一番大切なのは命だということに気づきますように。」

今でも、一年前のあの日、献花を終えて席に戻った僕に、ほほ笑みかけてくださった方々を思い出します。今年もまた、式典に参加されるかもしれません。いや、きっと参加されることでしょう。平和への祈りは、ずっと続くものだからです。僕も参加するつもりです。平和への祈りを胸に。

一冊の文集にて（黙祷）

金岡中学校　三年
山田　咲良

夏休みに入ってから私は、母から一冊の文集を渡された。

「いい機会だからこれを読みなさい。」

と。古ぼけて少しカビ臭い表紙の文集で、表紙に「曳船」と書かれてあり、一枚目をめくると白黒の人物の写真と名前森山作一郎享年五十九歳（昭和二十一年二月六日）と記載されてあった。立派な髭がとても印象的な顔だった。次のページをめくると、そこには複数の写真があった。一枚の写真の下には（森山作一郎設計の軍艦の進水式）また、他の写真の下には（出撃中戦艦武蔵）、（森山作一郎と当時の技術スタッフ）と書かれてある。先のページに進むと家族写真があり、その中に父の母、私の祖母の名前が書かれてあった。そこで私は、森山作一郎とは私の曾祖父にあたる人だと気づいた。

この文章には、曾祖父が長崎の三菱造船所のエンジニアであるということが書かれていた。この造船所で建造される艦船の内装及び木工関係を担当する部署を「木工場」といい、ここでは戦前約千名の職員・工員をかかえていて、曾祖父（森山作一郎技士長）はこの工場ではナンバー2の存在で、工場内では「神様のような人」と尊敬されていたようだ。戦時中は軍需工場として三菱長崎造船所では曾祖父は、海軍中佐相当の高等官待遇でもあったそうだ。また〝神風特攻丸四艇〟も担当。昭和十八年頃「丸四艇」と呼ばれる飛行機のエンジンを搭載した特攻用の小型速艇も曾祖父の木工場で建造されて、この高速艇の建造も曾祖父の担当下にあったそうだ。

家庭では、長男にはとても厳しい父親だったそうだ。しかし、私の祖母は父親っ子だったからかよく父親に甘えていたそうだ。我が家も兄が小学校の頃、学校から帰宅して父に一言

「今日学校で父のことを学んだよ!!地震雷火事親父だって！」

と。父にこつんとされ、母たちは大笑いしていた。やはり、遺伝なのかなと思った。そんな曾祖父も象徴である髭を終戦と共にそり落とした。

「敗戦国の者が髭なんぞ生やすことはない。」

と言って若い頃からの大事な髭をそったのだ。そんな曽祖父はきっと悲しく悔しかったはず。その後だんだんと疲れが出たのか弱っていったことが書かれており、薬は当時無かったため、肝臓に腹水が溜まり終戦の翌年二月六日に亡くなった。当時火葬場がなかったので、広い野原で大きな木を高く組んで遺体を焼いた。祖母が後書きに、

「木の上で焼くこんなむごい事をしなければならない、その悲しみはいいようがありません。」

あの頃、見ることができず遠く離れて泣いていたことがつづってあった。祖母のせつなさが読んでいて胸に伝わってきた。

社会、国家の為に貢献する意志を思い生きた曽祖父、また、その父を思う娘も、広島に人類史上初の原子爆弾が投下されてから三日後一九四五年八月九日午前十一時二分、プルトニウム型原子爆弾が長崎に投下され、被爆者となった。当時祖母は女学校にいて、投下された場所からは遠かったものの、校舎の窓ガラスが割れ、頭から全身にガラスの破片が刺さったという。そしてなんとか自力で自宅にもどることができた。しかし医者などに診てもらうことなどとうてい無理で、祖母の母に一つ一つピンセットでとってもらったという。

そのおかげで今の自分が生きているということを語っていた。そして今は亡き祖父も、まだ祖母といっしょになる前だった。当時は長崎大学の学生で、地下の実験室にいたため直接は原子爆弾を浴びてはいなかった。

しかし、長崎医科大学は爆心地から一キロ以内で、祖父のいたコンクリートの建物で外形は残ったものの内部は爆心地帯の建物と変わらず各階とも完全に破壊された。さらに火災となり負傷者が多く自力または救出され裏山に避難したという。しかし辺り一帯は言葉では言い表せない光景だったそうだ。夏の日にふと耳にする「黙祷」。いつもの暑い夏ではなく、いろいろな形で亡くなった人への切なさと今生きている私たちの平和に対する責任を考えさせられた夏だった。

（黙祷）

～ひめゆり～

静浦小中一貫学校　九年
大田梨莉

足を踏み入れたその場所は、私の戦争への見方を広げた。

八年生の頃から、沖縄修学旅行でアブチラガマに行くにあたって、沖縄戦の学習を始めた。ガマの中で恐怖に立ち向かい、一日一日を必死に生きる同い年の子たちがいたことを知った。

その時私は、小学生の頃に訪れた、父の故郷にある原爆ドームのことを思い出した。小学生だった私は難しいことは分からなかったが、戦争が自分よりはるかに大きい建物を壊してしまうほどの威力をもっているということ、一緒に見ていた親戚のおばあちゃんの悲しそうな目が強く印象に残った。

事前学習をすることで、当時のおばあちゃんの気持ちや戦争中の人々

の気持ちが分かったような気がした。

ガマに入る時、予想以上の入口の小ささ、手すりが見学用に作られて何とか歩けるようになっている通路など、写真や本だけでは分からない、戦時中の不便さに驚いた。当時の人々と同じ場所を歩くことで、戦争の現実味が増した。全員で懐中電灯を消して暗闇体験をした。今まで経験したことのない暗さで、目を閉じても開けても同じ暗さであることに混乱した。息が苦しくなって、今でも思い出すと怖くなってしまう。しかし、この暗さに加えて、当時の人々は「いつ殺されるか分からない」中で数ケ月間、生活していたのだ。私が体験したのは数秒間の暗闇だが、戦時中はいつこの暗闇が終わるか分からない。戦争中は暗い方が良かったと、当時の人々が語っていたけれど、今までずっと見てきた太陽の光を避けようとしていたと思うと、戦争は人間の価値観や自尊心さえも支配してしまうのだなと恐ろしくなった。

ガマの奥の方まで進み、隔離されていた重症者の方が生活していた場所で、ガイドの人にひめゆり学徒隊のことを詳しく聞いた。当時の十五歳の子たちは現実を見ていたと知り言葉が出なかった。話を聞くまでは、事前学習で同い年の子が周りのために命を危険にさらして働いていたことを知り、私よりも意志が強く、勇敢で立派な子たちがいたのだと感動しただけだった。だが、話の中で、学校でも家でも「天皇のために死ぬことは名誉なことだ。」と言われ続け、それを信じて自決をした彼女たちのことを知って、ひめゆり学徒隊に対しての考えが変わった。

人々を助け、強い気持ちや苦しい状況を耐え抜こうとする彼女たちは間違いなく傷ついた人々を支えていたと思う。そして彼女たちの行動の裏には、まだ純粋で子どもらしい部分がかくれていたのではないかと思った。学校や大人たちが言うことを純粋に信じて、日本は勝つとひたすら信じて一日一日を耐えていたのではないかと思った。日本の軍隊の力が弱まっていくと、「天皇のために自決しよう。」と今までずっと支え合ってきた友達と海に身を投げる少女たちのことを知った時には、人々を救った勇敢な少女たち、ではなく、私と同じただの無力で罪のない、幼い少女だったんだと思った。そんな彼女たちの未来や、これからの生活を奪った戦争を許せなかった。

彼女たちが信じた戦争が悪いのではない。大人たちの考え方も麻痺させて、同じ人間同士なのに、命を奪い合うという、あってはならないことをさせた戦争が悪いのだ。そして二度と繰り返してはいけない。

沖縄修学旅行を終えて、私と同じような少女たちが亡くなってしまった戦争は、他人事ではないと思った。こう思うことが出来たのは、戦争を経験した方々が私たちの世代まで戦争の恐怖を伝えてくれたからなので、今度は私たちが次の世代へつなげていく番だ。

戦争の恐怖、当時の人々の気持ちはこれからも語りつがれていき、とだえさせてはいけないと思った。そして、これからも戦争のない平和な世界を私たちの手でつくっていかなければならないと思った。

沖縄から世界へ

静浦小中一貫学校　九年
竹内悠真

沖縄。そこは日本の南に位置する南国の島である。透き通った空、緑あふれる台地、そしてサンゴが広がる広大な海。琉球文化が受けつがれ、とても活気のある、楽園のような島。沖縄と聞いて人々は、このようなイメージを持つだろう。しかし今、僕が沖縄と聞いて考えることは、たくさんの人から命や心をうばった、「沖縄戦」のことである。

僕たちの学校の修学旅行先は沖縄だ。小学生のころから、静浦のサンゴや海について調査や体験をしてきた僕たちだからこそ沖縄は修学旅行先に適していると考えていた。そのころはまだ戦争という言葉なんて頭に浮かんでいなかった。歴史の授業で初めて沖縄で戦争があったことを知った。僕たちは平和学習に行くんだなと分かった。それから月日がながれ、とうとう沖縄へ行く日。事前学習で、沖縄戦の悲さんさはよく理解している、と思っていた。ここからの体験や思いは今でも覚えている。

沖縄に着き、バスから外をながめると、きれいな海や空、緑の台地が見えた。こんな所で戦争があったのかと疑った。最初に行ったアブチラガマでは、背すじが凍りつくような恐怖を覚えた。ライトを消すと、何も見えなくなってしまった、生きる希望が閉ざされたような感覚になった。そんな中で人々は、敵からの攻撃におびえながら生活したり、けがを負い死ぬか生きるかの苦しい戦いをしていたという。ふいに、その空間がなま苦しく感じた。ただ聞こえるのは不気味な風の音と水の落ちる音。まるで泣いているかのようだ。

次に向かったのはひめゆりの塔だ。そこには、戦争当時に使われていたとされる物がいくつかかざられていた。ボロボロの服や道具を見て、とても怖くなった。ひめゆり学徒隊一人一人の写真がかざられていた。僕たちと同じくらいの人たちだった。それでも彼女たちは死にたくなるような仕事をまかされていたのだ。胸がとても痛くなった。戦争を体験された人の話を聞いた。「ガマに毒ガスが投げこまれ、気づいたらまわりにいた人のほとんどが死んでいた。」その言葉を聞いた瞬間背すじが凍りついた。もし今ここにいる人たちがいきなり全員死んだら……。僕は怖くてしかたなかった。外へ出て帰る途中、最初に向かった大きな穴が見えた。そこは毒ガスが投げこまれた現場だった。

最後に向かったのは摩文仁（まぶに）の丘にある平和祈念公園だ。そこは沖縄戦で最後の激戦地となった場所だ。辺りは豊かな緑の台地と太陽の光で輝く海が広がっていた。天国のような風景だった。ここが多くの犠牲を出した場所だなんて考えることができなかった。公園の中には沖縄戦で死んだ人の名前が一面に広がっていた。改めて沖縄戦の脅威や恐怖を感じた。ふと目を疑った。外国人の死者の名前も刻まれていたからだ。そこに日本人のやさしさを感じた。いくら敵でも同じ一人の人間なのだ、どんな命も大切なのだ。そう伝えているのだ。先へ進むと平和の礎があった。そこには地図がえがかれていて、沖縄にあたる

場所から水がわき出ていた。沖縄から平和を世界に広げていこうという意志を示しているのだ。その礎を越えて広大な海が見えた。この海を見ながら敵に殺され、自ら身を投げた人は、一体何を考えていたのだろうか。

沖縄は自然があふれ美しく、人々もやさしく生き生きとしていて、やはり戦争があったという実感がわかなかった。それでも沖縄では戦争があったのだ。僕たちはその事実をしっかりと受け止めなければならない。沖縄の人たちも、過去を受け止めているからこそ、やさしく生き生きとしているのだ。そして、平和を広めようと前向きに努力しているのだ。僕たちは、もっと日本での戦争や沖縄での事実をしっかり学び、受け止め、沖縄と共に日本一体となって平和を世界に広げていく必要がある。沖縄は世界平和への中心地となる。

命どう宝

静浦小中一貫学校　九年
前田　藍

大人になって学校の先生になるのが夢だった。あの戦争さえなかったら、彼女たちは楽しい日々を過ごすことはできただろうか。

ひめゆり学徒は、暗い、足場の悪いガマの中で負傷兵の看病をしていた。時には手術の手伝いや死体処理もしたそうだ。爆弾の音、兵士の悲鳴が常に聞こえるなかで、私と同じくらいの歳のひめゆり学徒たちは国のために働き続けた。

沖縄は、本州に戦争の被害を少なくするために戦場となった。沖縄戦は九十日間にわたった。住民を巻き込む陸上戦だ。この戦争で日本兵六万五千人、沖縄出身兵二万八千人、米兵一万二千人、一般市民九万四千人が犠牲になった。当時沖縄県の人口は約五十万人だったため、県民の四人に一人が亡くなったことになる。住民の多くは、自ら死を選んだそうだ。米軍に捕まってはいけないという気持ちが強かったのだろう。私は、このような状況に一日も耐えられないだろう。家族、友達をひきさき、多くの世代を巻き込んだ戦争。絶対あってはいけないことだ。

私は、沖縄に三泊四日で沖縄修学旅行へ行ってきた。海や空、ハイビスカスがとてもきれいだった。約八十年前、海や空は黒く、植物は焼け、沖縄の人々から笑顔をうばい、ここで銃の打ち合いがあったという実感がわかなかった。

私たちは、糸数アブチラガマへ行った。そのガマに入ると戦争の重苦しさを感じた。懐中電灯がなければまともに歩けない足場の悪いガマは、声がすごく響いた。負傷者のさけび声や爆弾の音、毎日聞こえていただろう。ガマの中には、靴やびんなどの生活用品があった。このような状況で生活していたと思うと、胸がぞくぞくする。全長二百七十メートルあるガマには、かまどや井戸、トイレや病棟、住民避難場などがあり、多くの人々が避難していた。六百人近くの負傷兵が続々と運びこまれ、ひめゆり学徒や軍医、看護婦は休む暇もなく働いた。腕

がなかったり、足を銃で撃たれていたり、意識がもうろうとしている人の看病はひめゆり学徒にとって辛いことだ。私はガマに入ることが精一杯で、ガイドの方の話が頭に入らなかった。今、自分が立っている場所が、かつて負傷兵が苦しんでいたかもしれない、市民たちが米軍に見つからないように静かに日本が勝つのを待っていたのかもしれない。そんなことを考えていたら、怖くて急に家族に会いたくなった。ガマから出ると太陽の光が当たってなんとなく安心した。何日もガマの中で過ごすことは辛いことだと感じた。

次に、摩文仁（まぶに）の丘へ行った。ここは、沖縄戦、最後の激戦地となった場所。沖縄の北部から米軍が上陸し日本軍がどんどん追い詰められた。今では波の音、風の音しか聞こえないが、日本兵が最後まで日本を守り続けた場所。ここには、たくさんの慰霊碑がある。戦争で何万という人が亡くなった。国のために命を落とした人、自決をした人、辛い日々だったことを感じた。

今回、沖縄に行ってみて戦争の辛さ、命の大切さを学んだ。学校に行けること、おいしいご飯が食べられること、家族や友達と楽しく過ごすこと、このあたりまえのような日々は、とても幸せだということ。またアブチラガマなどの戦争の当時の様子が分かる施設を大切にしていきたいと思った。戦争があったから平和について考えられる。

「命どぅ宝」

命こそ最高の宝。私たちが伝えていくべき言葉だと思った。

戦争をのりこえた沖縄の人たち

静浦小中一貫学校　九年
松原和里

「命どぅ宝」という言葉の意味を知っていますか。

私は、修学旅行で沖縄へ行きました。沖縄では、戦争の悲惨さを知ると同時に、沖縄の人たちのやさしくおもしろい性格、沖縄独特な雰囲気を感じました。そして今沖縄に住んでいる人は、基地の問題が残りながらも幸せに暮らしていると言っていました。しかし、どうして戦争が終わり七十四年たった今、沖縄の人たちは、はっきりと幸せと言えるのでしょうか。それは「命どぅ宝」という言葉があったからだと思います。この言葉は「命こそが宝だ」や「命が一番大切」という意味が込められています。戦争中、アメリカ軍につかまるくらいだったら自分で死んだほうがいいと教えられていた日本人が戦後、平和への道の第一歩を踏み出した言葉だと思います。しかし、今の私たちには、この言葉の意味は当たり前だと感じている人がほとんどだと思います。私も普段の生活や修学旅行に向けての事前学習のときに、そう感じていました。しかし、実際に行ってみると何とも言えない不思議なものを感じました。

不思議な感覚を一番感じたのは、アブチラガマでした。アブチラガ

マは、二百七十メートルの洞窟で、ここでは住民の避難地としてではなく、野戦病院としても使われました。そこには毎日、傷を負った重傷兵が運ばれてきて、その人たちの看護をしたのは、ひめゆり学徒隊と呼ばれる、私たちと同じくらいの年の人でした。私たちがアブチラガマに着いて、ガイドさんの話を聞いた時、ガイドさんたちはとても悲しそうな声をしていました。私は、事前学習でひめゆり学徒隊の人たちが、私たちと同じくらいの年で重傷兵の看護や手術までもしていたことを知り、ほとんど知っているつもりでいました。しかし、ガイドさんの悲しそうな声の本当の意味は、分かっていませんでした。ガマの入口に近づくと、今までと違う静かで冷たい空気が流れてきました。入口にある階段は、アメリカ軍に見つからないようにするために狭くうす暗くなっていて一気に今までとは違う雰囲気になりました。入ると冷たい空気と天井から垂れてくる水の音、どこを見ても暗闇しかありませんでした。本当にここで人が何日間も生活していたのかと思うほど暗く生活感は全くありませんでした。進んでいくと、井戸があって、少し上を見ると一筋の光がありました。小さな穴から入ってくる一筋の光。ガマにいた人たちは、この光を見て外で元気な生活をするために、がんばって生きようと思えたとガイドさんは言っていました。奥に進んでいくと、脳症患者の人が行く部屋がありました。そこへ行きみんなで一斉に懐中電灯の明かりを消すと、他とは全然違う雰囲気が広がっていて、私は急に何も見えない恐怖におそわれました。この部屋に入って生きて出てきた人はいないそうです。しかし、アブチラガマにいたことで助かった命もたくさんありました。アブチラガマに井戸があったこと、朝になると一筋の光が入ってきたこと等多くのことが重なり、ガマにいる人に生きようと思わせてくれたそうです。私は、事前学習で知ったつもりになっただけで、実は全然知らなかったのだと思いました。

このようなことを乗り越えた沖縄の人たちは「命どぅ宝」という言葉を大切にして、これからがんばろうと思えたそうです。私はこの四文字で沖縄の人たちが生きる勇気になったことが本当にすごいと思います。今の沖縄の人たちの明るく楽しい性格は、この言葉を大切にしているからなのかなと思います。この言葉には深い意味があると分かったと同時に改めて戦争は二度としてはいけないと思いました。

なくなったもの　なくしたもの

愛鷹中学校　三年
大嶽　健太

今、僕たちは平和に生きています。しかし、世の中には内戦などの争いによって、日々脅えながら生きている人たちがいます。

学校の授業で何度か戦争について考える時間がありました。そんなとき、

「戦争は絶対にあってはいけない」

と、授業のとき必ず先生に言われます。僕もそう思います。しかし今も、この世界のどこかで争いが行われていて、人が傷を負い亡くなっています。僕はとても悲しいことだと思います。

僕は二年前の十二月、ボーイスカウト活動の一つとして広島の原爆ドームへ行きました。

広島に着いてまず最初に、原爆ドームに千羽鶴を奉納しに行きました。原爆ドームには、日本人だけでなく、多くの外国人が原爆で亡くなった全ての人や動物の慰霊のために来ていました。千羽鶴を奉納しようとしたところ、そこにはすでに何万もの、数えられないほどの鶴が奉納されていて、中には鶴と一緒に平和を願うメッセージを書いて奉納しているものもありました。僕はそれを見て改めて、戦争はどんな理由があってもしてはいけないと思いました。

その後、原爆資料館へ行きました。資料館では被爆した人の服や黒ずみの弁当などの実物が展示されていて、原爆の恐ろしさと戦争の恐ろしさを実感しました。原爆の威力、被害の大きさなど、ことばでは表せられないほどのものでした。しかし、戦争ではそれら脅威となるものが、あたりまえのように使われます。

現在、日本は核兵器を所持していません。しかし、世界中の国々を見てみると国を守るためにといい、核兵器を平然と持っている国もあります。隠して所持している国もたくさんあります。世界で戦争をなくそうとしているにもかかわらず、なぜ、まだ核兵器を持ち続け、作り出し続けているのか、疑問に思います。

原爆ドームへ行った日の夜、近くのゲストハウスに友達と泊まっていました。そこでゲストハウスの人がお好み焼きを焼いているときに、広島にお好み焼き屋が多い理由を説明してくれました。原爆によって広島の人々は家族や家、友人など全てのものを失いました。さらに、徴兵された男性の多くが戦争で命を落としてしまいました。その中で残された人々が、一日一日を生き抜いていくために、終戦後にアメリカからの配給で一番多かった小麦粉を使い料理したことがきっかけでした。さらに、つくったお好み焼きを女性たちが販売したことで、広島はお好み焼き屋が多くなったそうです。それを聞いて僕は戦争は戦争中だけでなく戦争が終わった後にも影響し、人々を苦しませ続けることを知りました。戦争は、毎日死と隣り合わせで、満足な食事もできない、戦争で大変なのはそれだけだと今までは思っていました。しかし、それは違いました。

戦争が終わると日本中が焼け野原になっていました。原爆によってたくさんの命がなくなりました。生き残った人々も原爆による被害で足や手などを失いました。中には被害はなかったが、大切な人や家をなくす人もいました。そんな中食料もなく、家もない絶望的な状況でも人々は生きていかなければなりません。戦争は終わってもその被害により、戦争を行っている時と同じように人々を苦しませ続けます。広島に行ったことでそのことに気付きました。

今東京ディズニーランドやユニバーサルスタジオジャパンなどの遊園地や清水寺や浅草などの観光地へ行くと、そこにいる人は必ず楽しそうに笑っています。お腹いっぱいにご飯を食べて、家族や友達と一日中遊んで平和でとても楽しい時間を過ごしています。しかし、平和

すぎる時間を過ごしているうちに多くの日本人は戦争のことを僕のように忘れてしまっているのではないでしょうか。平和なのはごく一部の国や地域だけであって、今すぐにでも戦争がおこるかもしれないことを、いつ日常が崩れてもおかしくないことを忘れてしまっているのではないかと思いました。そのとき、僕は誰か世界が平和になったと勘違いしている人がいるかもしれないと不安になりました。

平和なことはすばらしいことですが、実際には、まだ一部の国だけであって、その国でも問題はいくつもあります。そして、核兵器を所持している国もまだたくさんあります。また、今もどこかでくだらない争いにまきこまれて、助けを求めている人がいることを、戦争があって人々が苦しんだことを、世界が平和になったとしても絶対に忘れてはいけないと思いました。

そして、戦争があった事実を忘れないために、戦争についてもっと詳しく知り、戦争を忘れてしまった人、知らない人に学校の授業やボーイスカウトを使い知ってもらい、多くの人に戦争について考えてもらいたいです。

伝える

愛鷹中学校　三年
深瀬　涼太

今年で、七十四回目の終戦記念日をむかえました。

沼津市は、一九四五年七月十七日午前一時頃、アメリカの爆撃機B29の爆撃を受けました。終戦を一カ月後にむかえようとしていたころでした。その年は、それ以前にも小規模な空襲や機銃掃射を受けていました。この七月の大空襲では、二百七十四人もの死者を出し、都市面積の九割を破壊されたとのことです。

ぼくの父方の曾祖母が、祖父や祖母に話してくれた、戦時中のつらい思い出話によると、その時は、真夜中にもかかわらず、あたりが昼間のように明るく、まっ赤だったとのことでした。これは香貫山の上空から照明弾が落とされて、そうなったようです。空からは、焼夷弾がバンバンと落とされて、とにかく皆狩野川の方に向かって必死で逃げたそうです。その時、曾祖母は、生後三カ月の赤ちゃんを背中に背負い、無我夢中で逃げたそうです。曾祖父は戦争に行っていたため、女一人で、想像もつかないくらいの大変な思いをしたとのことでした。

曾祖父はピョンヤンに出兵していたとのことでした。沼津大空襲の三カ月前の四月に、曾祖父たち兵隊を乗せた列車が沼津駅を通るという情報をどこからか聞いた曾祖母は、生まれてまだ一週間の赤ちゃん

を見せに駅にかけつけたそうです。そして、なんとか曾祖父に見せることができたそうです。

戦争が終わって、無事沼津に帰ってきた曾祖父は、駅に立って、とても衝撃を受けたそうです。なんと駅から千本の海が見えたのでした。全部焼け野原になっていて建物が何もなくなっていたとのことでした。

このような話を祖父や祖母から聞くにつけ、今、こうして毎日平和に暮らせている日本をなんてありがたいことかと、心からそう思います。

しかし、この平和な日本は、ぼくの曾祖父、曾祖母を初めとする、戦火にさらされた時代の人々の生命を初めとしたさまざまな犠牲の上に成り立っているものなのだと、痛感させられます。

今、世界では現在進行形で戦争をしている国があります。今、まさに多くの命が犠牲になっていることを思うと、その悲惨さは計り知れません。

ぼくはもちろん、ぼくの両親、そして祖父母たちも戦争を知らない世代です。だからといって、今のこの平和な日本での生活に甘えるのではなく、こうしているときにも、世界のどこかで、戦争の犠牲になっている人がいることを忘れずにいたいと思います。

曾祖父、曾祖母が経験したことは、今のぼくだったらとても耐えられません。空襲を受け逃げ回る日々、戦争に出兵するなど、精神的にも耐えられません。よく戦争の時代を乗り越えてこられたと本当に尊敬します。

戦争の時代を生き抜いてきた人たちと同じ経験をすることはできませんが、その人たちに心を寄せることはできます。ですから、このような話を、自分たちの後の世代に伝えていくことが、ぼくたちの役割だと思います。

日本においては、戦争がなかった平成が終わり、そして、令和という新たな時代に入りました。この平和な時代が永遠に続くように、戦争のつらい過去と向き合い、若い世代の人が中心となって、平和な日本をつくっていきたいと思います。そのためにぼくたちがすべきことは、戦争のつらい過去や、多くの命の犠牲の上に今があるということを伝えていくことだと思います。また、日本だけではなく、世界にも平和を発信していければいいなと思っています。

今、平和に生きているから

長井崎中学校　二年
瀬　川　志　海

戦争が何であるか知っているだろうか。なんとなくは分かるけれど、具体的には分からない、という人は多いのではないだろうか。私もそうだ。昔、戦争というひどいことがあったというだけで、具体的に何で始まって、何が悪かったのか、何が起こったのか、私は知らなかった。私は思った。戦争を知らないままでいいのだろうかと。私は戦争について調べてみようと思った。

私は戦争について調べてみた。日本より外国が悪いと思っていたけれど、日本も悪く、結局、戦争をして何が良かったんだろうと思った。戦争が起きたせいで、たくさん悪いことが起き、たくさんのものが失われ、たくさんの人が死んだ。もちろん私が調べたことはきっと表面的で、もっと複雑なことがあったのだと思う。でもやはり、こんなことは起きない方が絶対に良いことだなと思った。

しかし、今は平和だ。大きな争い事は、少なくとも、日本では起きていない。もちろん、幸せとは言えないくらしをしている人もいると思うが、今、少なくとも私は、平和にくらしている。もちろん、毎日が幸せで楽しいわけではないし、毎日が楽なわけではない。でも、楽しいことはたくさんあって、友達と話したり、いっしょに遊んだり、でも時にはぶつかって落ちこんだり。こんな感情、出来事、全てひっくるめて、普通の生活ができるだけで、今が平和といえるのではないのかなと思う。

しかし、戦争中は、とても平和と言えるものではなかったのだと思う。空から爆弾が降ってくるなんて、とても平和なんて言えたものではないと思う。人間によって作り出された平和とは言えない生活。戦争中の生活が私には想像することができないが、きっと苦しいものなのだと思う。それに比べて、現代は平和で、進化していて、発展していっている。

でも、戦争の爪跡は残っていて、まだまだ苦しんでいる人も多くいるのだろうと思う。しかし、戦争というものをちゃんと分かっている人は、多くはいないのだと思う。私はそのちゃんと分かっていない人で、なんとなくしか分かっていない人だ。私は、毎日平和にくらしているのに、過去にあった「戦争」というものをよく知らずに生きてきた。私は、こうして平和に生きていることができているからには過去の戦争のことを知るべきだと思ったのだ。だから私は戦争について知ろうと思ったのだ。今、こんなにも平和に生きていて、悠々と過去の戦争というものを知らずに生きていていいものだろうかと思った。

私は、もっと現代で戦争の知識、出来事などを多くの人が知るべきだと思う。今、少しずつ実際に戦争にあった人は減っていて、いずれはいなくなってしまう。でも、そこで終わりにしてしまうのではなく、戦争がどんなにひどいものなのかを、語りついでいかなければならないのだと思う。戦争というものはほとんどの人が知っていても、多くの人が具体的に知らないのだと思う。今を平和にくらすことのできている今の現代人は、きっと、戦争を知るべきなんだと思う。だから私は、今、平和に生きていることができているから、過去のこともちゃんと知っていこうと思う。まだまだ私は、戦争などのことを知っていないから、もっと知ろうと思う。そして、身近なことから、もっと毎日を平和に、幸せにしていくことができるようにしたいと思う。

私にとって当たり前のこと

原中学校　二年
庄　司　陽　菜

私が作文を書いている今でも、世界のどこかで紛争が起きています。私は今まで、戦争や内戦、紛争の違いがわからないほど、深く世界の争いについて考えていませんでした。そんな私が紛争に興味を持ったのは、学校の授業で紛争による、子供達への影響を学んだからです。

私を含め、多くの人が学校に通い、授業を受けています。学校が嫌いな人も少なくはないと思います。しかし、紛争地に暮らす約二千七百万人の子供は、学校に通えていないそうです。私は、学校に行きたくても行けない子供がいると知り、年齢も自分と変わらないような子が、私にとっては当たり前のことで悩んでいる現実を、どうにかしたいと思いました。

私は、毎日三食ご飯を食べます。好きな食べ物、嫌いな食べ物があります。それは、たくさんの野菜や果物を食べたからこそ分かることだと思います。しかし、世界ではたくさんの人が飢えに苦しんでいるというのです。世界には約一億五千五百万人の飢えた子供達がいて、そのうち、紛争の影響を受ける国々に住んでいる子供達は、約一億二千二百万人もいるそうです。この数字に、とてもおどろきました。なぜなら、世界の飢えた子供達は、日本の人口よりも人数が多いからです。今、この瞬間、飢えで亡くなってしまった人がいるかもしれません。一人でも多くの人を救うために、何かできることはないのかということを真剣に考えていかなければならないと思いました。そのためには、より多くの人にこの問題を知ってもらう必要があります。

世界には、たくさんの病院があります。私たちは、熱が出たり頭が痛くなったりすると、病院に行って治療してもらいます。薬をもらうこともあります。しかし、紛争の影響を受ける地域では、医療機関の不足・危険で病院に行くことができない・経済的に厳しいなどの理由で、受診できない人が多くいます。それに加え、医療施設が攻撃の標的となることもあります。医療施設は攻撃の標的になってはいけません。なぜなら、医師や患者も攻撃されてはいけないと国際法で決められているからです。それなのに、医療施設が攻撃され患者が満足のいく治療を受けることができない現実があります。そんな現実を、少しでも変えていくためには、病院を増やすなどの取り組みが必要だと私は考えます。「国境なき医師団」という組織があり、その組織は、世界各地の紛争地域などで命を救っているそうです。彼らはこれまで、たくさんの人の命を救ってきました。ですが、それでもまだ、困っている人がたくさんいるのではないかと私は思いました。私を含め、医師の資格を持っていない多くの人は、「国境なき医師団」の活動を応援して、一人でも多くの人が助かることを願うしかできません。それでは、医師ではない私たちには、何ができるのか。

私は、世界の紛争から子供たちを救うために、自分にできることを考えました。まずは、学校に行きたくても行けない子についてです。

一番良い方法は、無料の学校を、安全な場所につくることだと思います。しかし、私にそんな力はありません。安全な場所も、どこが安全なのかも分かりません。結局、一人では何もできないのです。次に、飢えに苦しむ人を助けるにはどうしたら良いかを考えました。そこで、私が取り組みたいと思ったことは、食品ロスを減らすことです。世界の食料廃棄量は、年間で約十三億トンです。食料廃棄量を減らすため、私は出された料理を残さず食べるようにしたいです。一人でも多くの人が長く生きられるように、これらの考えたことを、実行していきたいです。今すぐに行動することは無理でも、一人一人が考え、何十年後か何百年後には紛争がなくなっている世界があったらいいです。

過去の戦争と未来の平和

原中学校　二年
保科仁耶

「敵機襲来〜！」

その声が再び聞こえ、防空壕（ごう）に入りました。そして、ゴーッ……！という音が聞こえてきて、その大きな音がする度に怖さと不安がおそってきたといいます。

これは、私の祖母が子どもの頃に体験した太平洋戦争のときの話です。

当時は、アメリカ軍の戦闘機が爆弾を落としながら飛びまわり、たくさんの家が燃えてしまっていて、自分の家は大丈夫かとずっと思っていたそうです。幸い祖母の家は燃えませんでしたが、戦闘機の音はトラウマになり、今も飛行機が飛んでくるとビクッと反応してしまうと言っていました。

私の知らない戦争というものは、体験した人の記憶にはしっかりと残ってしまっていると思います。その時小さかった人たちは、たくさん怯えたことでしょう。またその時大人であった人たちは、家族を守らなければと必死だったことでしょう。それらを思い出すことが今でもあるのではないかと思います。辛かった経験は忘れてしまいたいけど、トラウマになっている人も多くいると思うため、その後の人生にも影響する戦争は、やっぱりいやなものだなと思います。

「戦争に負けました。」

長かった戦争の終わりを天皇が告げ、国民は泣いたそうです。国民には辛い戦いが終わり安心する人、日本が負けて悲しむ人、それぞれいたと思います。また、家族が兵隊として戦争に行き、その帰りを待っている人も、すぐに元の生活に戻れるわけではありませんでした。

戦争が終わっても、着る物が無いので、もんぺやぞうりで過ごしたそうです。また食べる物もないため、家族が多い家は一人が食べられる量も少ないし、学校のお弁当もさつまいもをふかしただけのものやとうもろこしなどで、中には何も持ってこられない子もいたそうです。

配給も決して十分ではなかったため、農業をやっていない家は、お米が安く買える仙台に行ったそうです。貧乏な家は買いに行くことも

できず、ちゃんと食べて生きていくのも一苦労だったのではないかと思いました。お金がある家でも、せっかく買った大切なお米をふろしきに包んで置いておくと、

「国に納めるためだ。」

と言って、警察が持っていってしまったそうです。その時は国民の暮らしよりも、国を元の形にもどす方を優先しなければいけなかったんだなと思いました。

私は戦争というものを知りません。当時の辛かった日々も、戦争を体験して被害にあった人たちの気持ちも分かりません。でも、そんな私たちにも、できることはあるのではないかと考えました。それは、これから二度と争いを起こさないよう、戦争の体験談、恐ろしさ、戦後の悲惨な生活などをしっかりと聞き、まず第一に自分が忘れないように伝えていくことだと思います。

これから始まる新しい時代は、争いの無い平和な時代になるということを、私は強く望みます。

戦争という出来事

浮島中学校　三年
杉山碧彩

八月十五日。平成という平和な時代に生まれてきた私からすれば、他の日と何も変わりのない日に思える。しかし、そうではない人もいる。年号が平成から令和に変わり、今年で終戦から七十四年を迎えた。私は学校の授業やテレビなどで戦争については知っているし、戦争はとても恐ろしいことである。実際に見たり、聞いたりしていない私でさえこんなに怖いと思うのだから、戦争を経験した人、戦争によって家族を失った人、今でも後遺症に苦しんでいる人は、とても怖かったと思うし、苦しくて悲しい思いをした人もたくさんいると思う。だから私は戦争によってどんな被害が出たのか、もう一度調べてみることにした。

一九四一年十二月八日、日本軍がハワイ・真珠湾を攻撃。この真珠湾攻撃から、太平洋戦争は始まった。一九四二年六月五日から七日、ミッドウェー海戦で日本がアメリカに敗北し、これをきっかけに日本は一気にアメリカに負け始める。一九四五年八月六日、広島に原子爆弾「リトルボーイ」が落とされる。これによって、十万人以上の多くの人が命を落とした。それから三日後、今度は長崎に原子爆弾「ファットマン」が落とされ、七万人以上の人が命を落とした。一九四五年八

月十五日、当時の昭和天皇がアメリカなどの国に降伏することを決定し、国民にラジオで降伏することを伝えたのだった。太平洋戦争は三年八カ月に及び、日本の敗北に終わった。

私は、ラジオで降伏をすることを聞いた国民は、やっと解放されると安心したと思った。

また、アメリカは日本の十倍以上の国力と軍事力を持っていたのだから、ほぼ勝ち目はないと思うし、もっと早いうちから降伏をしていればこんな大きな被害が出て、多くの人が命を落とすことはなかったのではないかと思った。それでも、最後まで戦った日本軍の人達はすごいと思う。

ところで、太平洋戦争によって犠牲になった人はどのくらいいるか分かるだろうか。太平洋戦争で戦没した日本軍の総数は約二百三十万人である。その過半数は戦死ではなく、食糧が補給されないために起きた餓死であった。また、日本人の戦没者数は三百十万人である。

私は、この事実に驚いた。戦争によって亡くなった軍人がほとんどだと思っていたから、餓死だと知り、かわいそうだと思った。

そして、今でも心を病み、七十年以上が経っても入院をしたままの人がいる。その多くは元軍人で、ＰＴＳＤという心的外傷後ストレス障害の人が主だった。また、黒い雨を知っているだろうか。それは原子爆弾投下後に降る泥やほこり、砂などを含んだ重油のような粘り気のある大粒の雨で、放射性降下物の一種である。これは広島市では北西部に、長崎市では、正確には分かっていないが、爆心地から半径千五百メートルに及ぶ地域に降ったとみられている。そして、その黒い雨の後遺症の一つにガンがあり、今でも苦しんでいる人は少なくない。黒い雨によって亡くなった人はたくさんいるだろう。

今回のことから私は、戦争は絶対にやってはいけないことだし、被害にあった人の気持ちを理解して生活しなければならないと思う。

そして、犠牲になった人たち、今もまだ苦しい思いをしている人のためにも、八月十五日がどんな日かというのをちゃんと理解する必要がある。まだ私の知らないところで戦争が起きている。争いだけで何かを決めるのではなく、お互いを理解し合い、協力することが大切だと思う。いつか戦争のない平和な国が今よりも増えることを願っている。

過去から学ぶこと

浮島中学校　三年
髙橋　愛花

令和元年八月十五日、終戦から七十四年がたちました。終戦のきっかけとなった原爆投下からも七十四年がたち、原爆ドームの様子や当時の日本、被爆者の方の思いなどをニュースや記事で見た方も多いでしょう。このようなニュースでは必ず「忘れてはいけない」「繰り返してはいけない」という言葉が多く伝えられています。では、本当に私たちはそのような行動がとれているのでしょうか。

先ほども例をあげたように、原爆は日本で起きた歴史的事件と言えるほど残虐な事件であったことは七十年以上たった今でも多くの人が知っていることでしょう。そういった原爆による「被害」は確かに忘れられてはいないと思います。しかし、その原因についてはどうでしょうか。ニュースでも取り上げられることはありますし、ある程度知っているという人もいるでしょう。でも、「被害」に比べると「原因」の注目度は低いように感じます。しかし、本当に「繰り返さない」を目標にするのであれば、「原因」に目を向け、あのような恐ろしい事件が二度と起こらないよう、「原因」から無くす活動がなされるべきだと思います。

現在日本では韓国との関係が話題になっています。これは日本政府が韓国に対しての輸出を制限したこと、ホワイト国から除外したことを原因として韓国では日本製品の不買運動や日本ボイコット運動が広がっている、というものです。輸出を制限した理由は、日本が何度もお願いしていたことに対して韓国が拒絶し続けてきたからで、これを聞くと日本は悪くないのでは、と思う人も多いでしょう。しかし、問題がここまで大きくなっているのには過去の出来事も影響しているそうです。日本は過去に韓国併合をしていたことがあり、そのことに対しての不満もおさまっていないと言われています。この頃と今は違うし、日本は韓国に何度も謝罪をしているのに、と思う人も多いでしょう。実際私もそう思いました。しかし、このことから分かるように、こちらがどう思おうとやられた側は簡単には許せないんだと感じました。これは日本が過去にした過ちであり、現在の判断がこれからにも大きな影響をもたらすかもしれないということです。また、今は大丈夫だと思っていても、原爆のときのように、トラブルからは何が生まれるか分からないのです。私たちが過去の出来事から学ぶべきことはこういったことなのではないでしょうか。

また、このことは日常的なことでもいえます。最近では、教科書のことでケンカになったという理由で中学生が同級生を殺害したというニュースもありました。こちら側からするとそんなことでと思うようなことですが、本当に何が原因となって悲劇が起こるのか分からないのがこの世の中だなと強く感じました。

私はこの作文の中で幾度となく「どんなことが原因となって事件となるか分からない」ということを言ってきました。ちょっとした口喧嘩やおふざけが人の命をうばうことになるかもしれないということです。これが過去の出来事から学ぶべきことなのではないでしょうか。過去の悲劇を繰り返さないために、そもそもの原因をつくらない、ではそのためには何をするべきなのか。ひとりひとりが考えて行動することが平和への第一歩だと思います。

平和のバトン

今沢中学校　二年
伊藤　ゆきは

八月十五日、終戦記念日。台風十号の接近で、各地の慰霊祭は中止になったとのニュースが流れていた。しかし、その中で

「戦争は嫌だよ……。」

と涙を流すおばあさんの姿がテレビに映し出される場面があった。私は何十年たっても癒やされることのない苦しみを抱えている人がいるということに胸がしめつけられる思いがした。

私は戦争を知らない。歴史の授業で、日本が戦争を繰り返し、他国とも戦争をしてきたことを知っている。でも、昔の出来事で、なかなか今の私の暮らしから想像することはできなかった。

しかし、おばあさんがおしゃっていた

「戦争は嫌だよ……。」

という言葉を思い返すと、戦争を知らないからこそ、私たちはもっと知ろうとしなくてはいけないのではないかと考えた。

私は早速戦時中の沼津について調べた。沼津では昭和二十年七月に大空襲があったという。なんと、たった二時間の間に九千発以上の焼夷弾が投下され、一万戸近い家が焼け、二百七十四人が死亡、市の八九・五パーセントが破壊されたそうだ。

さらに、御成橋には大空襲の三カ月前の空襲でB―29から爆撃されたあとがあることを知り、私は足を運んでみることにした。

父や母が運転する車で何度も通ったことがある市内の御成橋。川の流れがきれいだな、ひと休みしている人がいるな、など、いつも橋の下に広がる景色ばかりを見ていた。しかし、橋の支柱にこんな傷があったとは……。へこみに手をあててみるのはやっぱり少し怖かった。

多くの人が空から落とされる焼夷弾におびえ、急いで逃げたことだろう。近くで燃える家があったかもしれない。人々が逃げまどう様子。亡くなっている人。ケガを負った人の痛みや家族が犠牲になったときの苦しみや悲しみ。日々恐怖を感じながら生きぬいていくということ。へこみを見ていると様々な情景が頭に浮かび胸が苦しくなった。

戦争は誰も幸せにしなかった。七十四年経った今でも流れるおばあさんの涙がそれをよく表している。戦争を知らない私たちができることは戦争を知ること。知るほどに悲しく、苦しい気持ちになっていくけれど、私は本を読んだり、戦争の爪跡を訪れながら、その時何が起きたのかを目を背けることなく、正しく知っていこうと思う。

今、日本は戦争をしていない。これからも戦争のない平和な毎日を過ごしていくためにも、平和は当たり前にあるものではなく、平和を願う人たちの意志から生まれ、続いていくものだということを胸に刻みたい。そして「平成の世代」と呼ばれる私たちが平和のバトンを受けとり、また次の世代へと引きついでいけるように、しっかりと前を向き、平和を受けついでいきたい。

原爆の地を訪れて

今沢中学校　二年
山田嘉乃

一九四五年、八月六日、午前八時十五分に、広島に原爆が落とされた。その三日後の九日、午前十一時二分に、長崎にも原爆が落とされた。日本が、世界で原爆を落とされた、唯一の国となった。

昨年の八月、私は広島へ行った。きっかけは、その半月前に起こった広島豪雨のニュースを見て、気になっていたことと、八月に入ってから、テレビで戦争や原爆についての特集ばかりやっていて、特に原爆についてもっと知りたいと思ったからだ。

広島で、一番最初に見学したのは、原爆ドームだった。焼け焦げた骨組みがむき出しで、全体が黒くなっていた。実際に見て、どれほど被害が大きく、悲惨だったかがよく分かった。原爆ドームの近くには、「死の川」と呼ばれる川がある。被爆直後、被爆者たちが水を求めて川に飛び込み、水を飲んだ直後に亡くなり、川にはたくさんの遺体が浮いていたから、そう呼ばれたそうだ。今のキラキラした、のどかな川の様子からは、当時の状況を想像することは難しかった。

その後、平和記念資料館に行った。やけどを負った人の写真や、当時の写真がたくさんあった。どれも痛々しく、私がこんなやけどを負ったら……と思うとぞっとした。被爆した遺品もたくさん展示されていた。焼け焦げてボロボロになった服。溶けて曲がったビン。真っ黒になった三輪車……。その中で一番印象に残っているのは、八時十五分で止まった腕時計だ。一瞬で平和な時間が止まって、多くの人の命が奪われてしまったのかと、とても悲しくなった。

資料館を出た後も、悲しい気持ちはおさまらなかった。今、私が送っている何気ない日々が、どんなに平和で幸せなことか、感じることができた。多くの罪のない人が、原爆によって亡くなったことを、とても悲しく思う。アメリカには、原爆を落としたおかげで戦争が終わったと、日本への原爆投下を正当化する人がいると聞いたが、たとえ原爆によって戦争が終わったとしても、やはり原爆は落としてほしくなかった。原爆の悲惨さを知った私は、そういう考えを持っている人がいるのが、とても悔しかった。

今でも戦争が続いている国がある。世界から戦争をなくすために、私たちにできることは少ないかもしれない。でも焼け焦げた服を着ていた人、真っ黒になった三輪車に乗っていた子や、その家族のことを、みんなが少しでも想像することができたら、いつか世界中が平和になることも、不可能ではないと思う。

映画から

今沢中学校　三年
亀岡　愛幸

悲しい。私は素直にそう思った。

中学三年生の歴史の授業では、戦争について勉強したり映像を見たりした。しかし、これまでに学校で見た映像で、こんなにも悲しくなったことはあっただろうか。

私は授業以外でも戦争についての映画を見た。それは、特攻隊が中心となっている映画だった。

私は母に誘われ、軽い気持ちで見たのだった。しかしその内容は強烈で、今でも鮮明に覚えている。

主人公は凄腕の零戦乗りで、周りから「臆病者」などといくら罵られても、優しく接し、

「娘に会うまでは死ねない。」

と言い続けた人だった。

「必ず帰ってきます。」

と約束した人だった。しかし、その約束が守られることはなかった。

私はとても悲しい気持ちになった。敵の空母に自ら突っ込むことは、どんなに怖かっただろうか。それを考えると、やるせない気持ちでいっぱいになる。

戦争の時代があったからこそ、今の時代がある。戦争では莫大な被害が出る。私が見た映画の中心となっている特攻隊だけでも戦没者は八千人を超えているという事実がある。そのような中、平和な時代にしてくれた人たちがいる。だから私は何があっても戦争を起こしてはいけないと思うのだ。こんなにもたくさんの犠牲を出す戦争をしたところで、誰一人として喜ばない。逆に、それぞれの大切なものをいとも簡単に奪ってしまい、みんながつらい目にあうことになる。そんなことは二度とあってはいけない。

平和とは何なのか。私はいつも通りに一日を過ごせることだと思う。しかし、その答えは人それぞれだとも思う。今でも紛争地域などはある。したくもないのに巻き込まれて、助けを求めている人もいる。その人たちのために動くことができるＮＧＯや青年海外協力隊に、私はとても心惹かれている。

今の時代は、戦争を知らない人の方が圧倒的に多いだろう。戦争を体験した人からすれば、この生活に、この時代に対する感謝が足りないと思うはずだ。確かにその通りだと思う。例えば、今でも北朝鮮などは核兵器という戦争に使った兵器の実験を続けている。このままでは第三次世界大戦が起こってもおかしくはないだろう。しかし、そんなことを絶対に起こさせてはいけない。そのために私たちは戦争への理解を深め、戦争の事実を、人間の愚かさを、これからの世代に伝えていくことが必要だ。そしてそれは私たちが担うべき義務である。

遺骨のないお墓

門池中学校　一年
勝俣　孝太朗

ぼくは、母の実家の墓参りに行くと、二つのお墓に手を合わせる。それはいつものことで、なぜ二つあるのか考えたことはなかった。

この日は、祖母が病気で亡くなってちょうど五年が経つので、お墓に刻まれた名前を見ていた。一方の墓石には祖母を始め、たくさんの名前が彫ってあり、もう一方の墓石には一人の名前しかないことに気づいた。そこには、「常吉二十四才」と彫ってあった。

ぼくは不思議に思い、その理由を祖父に聞いてみた。戦争で亡くなった祖父の叔父さんだということだった。更に、お墓の中には遺骨は入ってなく、写真一枚だけだというのである。ぼくは、遺骨はどこにあるのだろうと疑問に思った。

祖父の話によると、常吉さんは二十才の時に海軍砲術学校に入り、その後戦艦山城に配属されることになったそうだ。旧式戦艦であった山城は、日米開戦後も内地に留め置かれていたが、戦局の悪化により、フィリピンでの反撃作戦に担ぎ出された。しかし、スリガオ海峡の夜戦で魚雷攻撃を受け、敵戦艦の集中砲火を浴びて、ついには海底に沈んでしまった。生存者はごくわずかという無残な最期だったということだ。祖父の話は、ぼくが想像していた以上に残酷だった。大勢の人の命が一瞬でなくなる戦争がとても怖いと思った。

祖父の話には続きがあった。沈没後、幾日かして、家族のもとへ国から通知が来たそうだ。常吉さんが亡くなったという知らせと、本人の顔写真を国に送るようにと書かれていたということだった。それから数日後、今度は骨壺が送られてきたが、その中に骨はなく、こちらから送った写真が入っているだけだったらしい。この骨壺と写真が、常吉さんのお墓の中に入っているということなのだ。

ぼくの中に悲しみと怒りが込み上げてきた。常吉さんは召集令状が届いたとき、きっと胸を張って家から送り出されたはずだ。それなのに、常吉さんを心から待っていた家族が、遺骨すら受け取ることが出来なかったことを思うと、親や兄弟はどれほど悲しく、悔しかっただろうと胸が張り裂けそうになった。その怒りはどこにぶつけられたのだろう。おそらく、どこにもぶつけられなかったのだと思う。ぼくは、このような納得のいかないことを当たり前のように受け入れなければならなかった時代に対し、立ち尽くすような不安を抱いた。

ぼくは「戦争」という言葉を辞書で引いてみた。そこには「軍隊と軍隊とが武力を行使して争うこと。特に国家間の全面的な戦い」と書かれていた。これではよく理解できなかったので、別の辞書も引いてみた。「戦争の対義語は平和」とあった。戦争をしている国は、平和でないということになる。続けて、「平和」の意味も調べてみると、「戦争や紛争がなく、世の中が穏やかな状態にあること」とあった。世界の歴史を考えてみると、平和な時間より、争いのある時間のほうが圧倒的に長いと言えるのだ。

今も世界では、紛争が絶えず、新しい戦争ともいえるテロも他人事ではない。東京オリンピック・パラリンピックをひかえ、テロは身近なものとして恐怖を感じる。ぼくは、果たして戦争がないときと戦争があるときとでは、どちらが当たり前なのだろうと思った。本当に世界は、そして日本は平和といえるのだろうか。

争いはどこにでもある。それぞれの意見が合わないときはたくさんあるが、武力や暴力を使うのか、それ以外の方法を使うのかは選択できることだと思う。戦争は国家間で起こり、それによって「何か」は決まるかもしれないけれど、解決はしない。ぼくはこれから自分の周りで争いが起きたとき、勢いで物事を決めるのではなく、冷静に考える力や、話し合って解決する力を普段から意識していきたい。それは平和を作るための確かな一歩のはずだからだ。

平和のために

門池中学校　二年
三ツ木　柾　翔

広島・長崎への原爆投下は、人類が絶対に忘れてはならない悲劇だと思います。

八月六日と九日、広島の町と長崎の町が一瞬のうちに破壊され、まだ生きていられたはずの多くの人が亡くなってしまいました。また、原爆の発した放射能によって、長い間体の不調に苦しんだ人や、差別を受けて心に傷を負った人もたくさんいました。

僕には、九十六歳の曾祖母がいます。曾祖母は戦争を体験しました。話を聞くと、戦争中は、照明弾が夜の真っ暗な空を明るくすることが多かったそうです。飛行機に狙われるから、家を目立たせない為にあかりをつけない、灯火管制の下にあったのに、その照明弾によって建物の場所や様子がばれてしまうそうです。また、空襲警報が鳴ると防空壕に逃げ込んだことや、食べ物がさつまいもやかぼちゃくらいだったことも聞きました。静岡でもこんなにつらい生活をしていたのだから、広島や長崎は想像もつかないほどつらい生活をしていたのではないかと思います。

僕は以前、長崎平和公園に行ったことがあります。公園にあった平和の泉の目の前に、少女の手記を刻んだ石碑がありました。その内容は、

喉が渇いてたまりませんでした
水にはあぶらのようなものが
一面に浮いていました
どうしても水が欲しくて
とうとうあぶらの浮いたまま飲みました

というものでした。原爆のため体内まで焼けただれた被爆者は、「水を」とうめき叫びながら死んでいったそうです。水を求めて、川へ飛び込んだのでしょう、川にはたくさんの死体が流されていたといいます。攻撃によって破裂した爆弾のかけらや、爆弾の油でひどく汚れ、体に

悪いと分かっているのにもかかわらず、極限まで喉が渇いていてそんな水でも飲んでしまう。僕はこの石碑を見て、飲める水もなく命の限界を迎えてしまった人たちの、筆舌に尽くしがたい苦痛を思い、とても心苦しくなりました。そして、今の日本では、簡単に水や色々な食べ物が手に入るということはとても幸せで、ありがたいことなのだと感じました。

何故、一つずつの命をもらって生まれてきた人間同士が殺し合わなければいけないのでしょうか。たった一つしかないその貴重な命を国のために捧げ、特攻隊などといって敵に突っ込み、その一瞬にして命を散らすなんて、どう考えてもおかしいと思います。

人には必ず大切な人がいます。それは、日本人でも敵国の人でも同じです。そして、その家族は、戦場から生きて帰ってくることだけを願っていたはずです。互いにそう思っていた人間同士なのに、争うことで大切な人を失う。武器を持ち互いの幸せを奪い合う戦争なんて、世界中の全ての人間にとって無意味だと思います。

そんな戦争がまだ世界各地で起こっています。同じ国の人間同士で紛争が起きているところもあります。もしも戦いが続いてしまったら自然や多くの遺産が破壊されるのはもちろん、夢や希望にあふれた人たちが、何の罪もないのに無差別に殺され、残るのは破壊の跡と苦しみだけです。

僕は、この世界が平和になるためには、世界中の人たちが協力し合うことが必要だと思います。皆が互いの文化を認め合い、足りない部分を補っていけばいいと思います。住んでいる地域が違ければ、文化も宗教も違って当然です。分かり合えない部分もあると思います。でも、すぐに否定するのではなく、理解しようと努力することが大切です。そういう努力や思いやりの積み重ねが互いに理解し合うことにつながって、平和へと花ひらくのだと思います。

日本にとっては、「戦争」といえば「原爆」というほど、広島・長崎の悲劇は深い傷です。でも、その傷から目をそらしてはいけないと思います。傷をしっかり見つめ、同じ過ちを繰り返さないよう、自分に何ができるかを考えながら生きていきたいと思います。

未来へ

門池中学校　二年
渡邉　颯

八月十五日。七十四度目の終戦記念日を迎えました。毎年この時期になると、テレビなどで戦争についての特集が組まれます。そして、時代は、戦争を体験した人が年々減り、戦争の恐ろしさを実体験としては知らない世代が中心となっています。

僕はテレビで、戦争を扱ったあるドラマを見ました。太平洋戦争の時の広島を描いた作品です。その中で印象に残ったのは、五歳くらいの女の子が歩いていたときに、爆弾が爆発して、死んでしまった場面です。女の子と手をつないでいた主人公は、自分が左手で彼女と手を

つないでいればよかったと、自分を責め続けます。僕は、どうして何の罪もない小さな女の子が命を落とさなければいけないのかと、怒りが込み上げてきました。二人は何も悪くありません。ただ、厳しい時代を懸命に生きていただけなのです。僕は人の命の尊さを考えもせずに戦争を起こす世の中が悪いと思うし、そんな当時の世の中が許せません。

さらに、ドラマには、あの〝八月六日〟が描かれていました。そう、広島に原子爆弾が投下された……。とてもまぶしい光、キーという不気味な音、顔や体が判別できないくらい真っ黒な人。それらが僕の目に焼きついて離れません。主人公は、呉市に嫁入りしていたため無事でしたが、広島に住む家族や友達を失ってしまいました。どれほどつらかったでしょう。元気に生活していた、大切な家族や友達が、一瞬にしてこの世から消えてしまったら……。僕はもし、家族や友達と急に二度と会えなくなってしまったら、支えも道標も失い、きっと悲しむこともできないままただただ呆然としてしまうことでしょう。生きる希望を失ってしまうはずです。その後主人公は、嫁いだ家を守るために立ち直り、自分らしくたくましく生きていきました。僕は主人公の強さに圧倒されました。

僕はこのドラマを通して、改めて戦争の恐ろしさに衝撃を受けました。戦争はたくさんの人の命を奪うだけでなく、大切な人と自分を離ればなれにさせるものだと思います。戦争は、人の体はもちろん、心をもずたずたに引き裂く恐ろしいものなのです。

では、どうして世界は戦争をしていたのでしょうか。それは、どの国も自分の国の利益しか考えていなかったからです。そして、その国を作るのが人間です。みんなが自分の都合のいいように何かをしようとし、自分のことしか考えていなければ、必ずけんかになったり言い争いになったりします。でも、相手の立場になって物事を考えれば、相手と上手く接することができます。他人を思いやる気持ちがあれば、争いを避け、いろいろな人と仲良くすることができます。だから、世界中の人々が他人を思いやる心を持つことこそが、平和への近道なのだと思います。

戦争はたとえ勝ったとしても、憎しみや悲しみを残します。戦争をしたら、敗れた国は、相手国を憎み、その憎しみは新たな戦争の火種になります。だから、戦争をしたら平和になることなどないのです。平和にするための戦争なんて、どれだけ理屈を並べたとしてもあるはずがありません。

僕は、「国とは何か」と尋ねられたら、「国とは国民だ」と答えます。国益のために国民から幸せを奪い取る、なんていう行動は理解できません。僕は、日本という国に利益があっても嬉しくありません。世界中の人間が大切な人と笑顔で幸せに暮らすこと。そういう世界中の人間の利益の方が、よほど大事です。

世界中の人々が幸せに毎日を送るには、絶対に戦争を繰り返してはいけません。そして、これからの社会・世界は、僕たち若者が動かしていくのです。同じ過ちを二度と繰り返さないため、戦争の恐ろしさ・命の大切さを、世界中の全ての人が真剣に考えていかなければなりません。それが、僕たちの使命だと思います。

あの日を忘れない

門池中学校　三年
大庭千尋

「黙祷」

八月六日、午前八時十五分。その声と共に、テレビ画面の中の人たちは、一斉に目をつぶった。同じくして私も一分間、目をつぶり、戦争で亡くなった人のために祈った。

一分後、私が目を開けても、画面に映し出される広島の人たちのほとんどは、目を閉じたままだった。そして、その中には、外国の人も含まれていた。広島には、終戦から七十年以上経った今でも、各国の代表が広島を訪れている。

原爆は、日本だけでなく、世界中に、大きな影響を与えた。それほど恐ろしいものだということを知ったのは、小学六年生のときだった。私は、原爆がどのような影響を広島にもたらしたのか、具体的に知りたくなった。そして、図書館へ行ったりインターネットで調べたりと、自分の思いつく方法で調べることにした。

中学生になると、社会や国語の授業で、戦争について学習する機会が何度か出てきて、その中で、日本に何が起きているのかをより詳しく知りたい、考えたいという気持ちが大きくなっていった。その思いを原動力に私は再度調べてみることにした。

ときは、一九四五年八月六日午前八時十五分、広島に原爆が投下された。原爆による爆風で爆心地から二キロメートル以内にあった木造家屋はほぼ全壊し、生き残った人はほとんどいなかった。強烈な放射性物質と熱線が放射された。そのため、爆心地から二百六十メートル離れた銀行の石段は、表面は白っぽく変化し、人が腰かけていたと思われる中央の部分だけが影のように黒くなって残った。広島の街は一瞬にして焼け野原になった。爆心地から火を吹いて全焼した。上空には、巨大なきのこ雲が立ち上がった。きのこ雲は、放射性物質を含んだ「黒い雨」を降らせた。黒い雨には、粘り気があり、人の服や白い壁などに雨の跡が残った。池や川には、死んだ魚がたくさん浮かんでいた。そして、原爆の影響により、その年の十二月までに、広島市民の約四割にあたる約十四万人が亡くなった。たとえ生き残ったとしても、時間が経つにつれてさまざまな病気を発症した。そして今もなお後遺症に苦しんでいる人がいる。

戦争体験を話せる人は、年々減っている。そして、およそ七人に一人の若者は「終戦の日」を知らないのだ。誰もが授業で必ず一回は習ったはずなのに、七人に一人も「終戦の日」を知らないことに私は驚きと共に危機感を覚えた。

しかし、そんな世の中だからこそ、今、私たちは、戦争を体験した高齢者からできるだけ多くの思いを受けとる必要があると思う。その体験も含め、戦争の記録や資料などから戦争とは何か、それが人々の日常や心をどのように奪っていくのかを学ぶことが大切だと思う。そして、私たちが聞いたことや学んだこと、考えたことを、次の世代を

生きる人たちに語り継いでいきたい。

日本は終戦以降、戦争はしていない。しかし、世界には、戦争や紛争の絶えない国がある。そういう国を一つでも減らすために日本ができること。それは、唯一の被爆国として、亡くなった方々の声にならない思いや原爆の恐ろしさを伝え続けることだ。そして日本が二度と戦争を起こさないためにも、戦争体験者から受けとった思いを受けとっただけで終わらせてはいけない。次の世代へ伝えていく責任があるのだ。私たちも新聞やニュースで報道される情報に気を配り、何が起きているのか知る必要がある。人任せではなく、自分のこととして物事をとらえていかなければならない。なぜなら私たちには、十八歳から選挙権が与えられるのだから。

情報収集を怠らないこと。物事に興味をもつこと。自分の考えばかりを押し通すのではなく、相手の考えも大切にすること。多様な価値観があることを理解すること。これが、今すぐ私ができること。これらを頭で考えるだけではなく、実際に行動に移すことで、平和な未来の土台を作っていきたい。

平和への夢よ、叶え！

門池中学校　三年
須藤恭平

「これは何？」

まだ小学生にもならない男の子が、血まみれの絵の前に立っていた。

「これはね、大きな爆弾が落ちてみんなぐちゃぐちゃになっちゃったんだよ。」

そう母は答えた。小さい子には、到底理解できるはずのない出来事を前に、男の子は顔をしかめ、立ち尽くすことしかできなかった。

僕は、夏休みに再び広島を訪ねた。初めて訪問したのは、まだ物心もついていない頃だった。だから、そのときの記憶は全くない。

原爆投下当時のまま崩れかけた原爆ドーム。数えきれないほどの折り鶴。天を仰ぎ、平和を叫ぶ原爆の子の像。平和の道を通って、僕はリニューアルされた原爆資料館に足を運んだ。僕の心は、楽しみな感情でいっぱいだった。しかし、それは一瞬にしてかき消された。血まみれの絵が続く館内。原型をとどめない壁や鉄骨。炭化した弁当。笑顔の消えた少年、少女。直前まで子供を乗せていた自転車。熱線によって残った「人の影」。焼けた服から伝わってくる痛々しいメッセージ。死の合図のように浮かび上がる赤い斑点。永遠に残る悪魔のケロイド。決まって「亡くなった」という表現で終わる展示解説。これらは全て、

八月六日で止まったままの記憶なのだ。

広島や長崎を数回訪問したことのある僕にとって、原爆について考えるのはとても身近なことだった。小学生の頃から、家にある「はだしのゲン」の漫画を手あかまみれになるほど読んできた。そのためか、八月六日には、毎年決まって僕はラジオの前に立つようになっていた。

それでも僕は、未だに分からない。八月六日の風景が。「まぶしいという言葉では言い表せない強い光」「一瞬にして焼き尽くす強烈な熱」「火傷を負った人の苦しみ」。その場にいないと分からない。その思いは、今回再び実物を目にしたにも関わらず変わらなかった。

しかし、資料館見学のほぼ最後のコーナーに来たとき、僕は八月六日の風景に出会った。「被爆証言」を視聴することができたのだ。そのビデオでは、被爆者の皆さんが五感で感じとった出来事を言葉にしていた。逃げ惑う人や雲や草の「動き」。被爆者の「叫び」や「祈り」。これらは決して絵や写真では表現することができない。被爆者の皆さんは、自分の感じた正直な気持ちを言葉に乗せて、僕たちに伝えてくださったのだ。僕は確信した。これこそが、平和な未来を築くための大きな原動力になるのだと。目を背けたくなるような悲惨な歴史を語り継ぐ必要がそこにあるのだと。

時代は「令和」になった。「和」は原爆を経験した「昭和」の「和」と同じだ。しかし僕たちは今、この文字に強い平和への誓いを込める。昭和の反省を平成、令和へと繋ごうと。僕たちが生きているこの時代。戦争を知る者は減り、被爆者の声を直接聞くことが困難になってきている。そのうえ、平和を目指しているはずなのに、人は武器を手放すことができない。この矛盾した世界に僕は終止符を打ちたい。

僕は決意した。広島で受けとった魂・言葉を自分の言葉で隣の席の仲間に伝えよう。僕の伝えた言葉は、国境を越えて、時代を越えて繋がり、受け継がれるはずだ。写真や絵ではなく、自分の言葉で平和を繋ぐのだ。そうすればきっと、武器よりも強い言葉の鎖となって平和を訴えることができるだろう。僕はその一人になりたい。

いずれ必ず戦争を知る人はいなくなってしまう。それでも平和な世界は残っているだろうか。いや、絶対に残さなくてはならない。僕たちにはその使命があるのだ。これからの時代を、笑顔で生き生きと生活したい。そのためにも、歴史を、先人たちの思いを真剣に受け止め自分の言葉に替えて伝える。言葉で世界を繋ぐのだ。

血まみれの絵を前にしてただ立ち尽くすことしかできなかった男の子。この子は今、どんな夢を持っているだろうか。僕はこの子の夢を叶えさせたい。この子から自由を奪いたくない。夢を持ち、何もおびえることなく生きていける社会。僕はそんな社会を作り出し、自分の目で見てみたい。

世界平和実現に向けて

市立高中等部　一年
熊谷　駿

僕は今まで、平和について深く考えたことはありませんでした。「平和」とは、戦争などがなくて、世の中がよく治まっていることと言われています。

僕の周りのごくせまい範囲で言えば「平和」と言えるかもしれません。しかし、世界では、今も戦争やテロがあり、日本でも物騒な事件が起こっています。世界中で多くの人が、世界平和を願っているのに、なぜ「平和」という世界は実現することが出来ないのか。戦争をなくすにはどうすればいいのか。

僕は、戦争というものをよく知りません。今まで戦争の報道番組やドラマなどがテレビで放映されていても、過去のことだし、こわいからと積極的に知ろうとしてきませんでした。

夏休みに長崎に旅行することになり、「平和」について考えようと思い、平和公園と原爆資料館に行きました。平和公園は本当にここに原爆が落ちたのかと思うぐらいきれいで静かな場所でした。原爆資料館には、原爆投下後の街の様子を写した写真やケガをした人の写真や遺品、原爆で溶けてしまったコーラのびんなどが展示してありました。原爆が投下された時刻に止まってしまった時計もあり、この時刻に一瞬にして多くの命が奪われたのかと思うと何とも言えない気持ちになりました。遺品や写真などの中には目をそむけたくなるほど残酷でおそろしいものもありました。でも、目をそむけてはいけないような気がしました。この原爆によって、犠牲になった人や家族を亡くした人、今も原爆の後遺症に苦しんでいる人に失礼な気がしました。

僕は、戦争のない国に生まれ、住む所、食べる物、着る物に困ることはありません。家族に守られ、学校で勉強し、友達との楽しい時間を過ごすことが出来ています。そしてこの生活がいつまでも続くと信じています。このような何不自由のない生活を当たり前のように過ごしてきました。しかし、原爆資料館を見学して、当たり前の日常がどんなに幸せなことかということを実感しました。そして、大切な家族や当たり前の日常を奪う戦争を二度と起こしてはいけないと思います。世界から戦争をなくすことは簡単なことではないかもしれません。でも、僕たち中学生でも、出来ることはあるはずです。自分のことを優先するのではなく、相手のことを尊重し、他人の幸せを考え行動することで身の回りの小さな争い事をやめることが出来ます。小さなことでもみんなが行動することで大きな力になり、世界を動かすことが出来るかもしれません。

世界中が平和になるには、長い時間がかかるかもしれません。しかし、あきらめず常に一人一人が平和のために何が出来るのかを考え、努力していけば、いつかきっと、みんなが笑顔になれる平和な世界が実現出来ると思います。

世界を平和に

市立高中等部　二年
秋山叶羽

私は、この世界で二度と「戦争」が起こらないことを願っている。私の人生の中で戦争が起こったことは一度もないが、戦争が起こることによる悲しみは理解することが出来ていると思う。

みなさんは、「火垂るの墓」と「この世界の片隅に」という映画を知っているだろうか？この「火垂るの墓」という作品は、親を亡くした十四歳の兄・清太と四歳の妹・節子が終戦前後の混乱の中必死で生き抜こうとするが、その思いも叶わずに、悲劇的な死を迎えていく姿を描いた物語である。私は、この映画を何回も何回も見たことがあるが、いつも心を動かされる。この映画からは、親を失うことのつらさやその中で、行くあてもなく自分たちだけで生きていくことの大変さ、食べるものもろくに確保できず、寝るところさえもまともにない状況だったことを学ぶことができ、深く考えさせられた。

また、「この世界の片隅に」も、戦争で身近なものが失われていく中で、工夫を凝らしながら日々を生きていく少女・すずの姿を描いた物語であり、これも、「火垂るの墓」と同じようにたくさん学ぶことができた。そして、戦争や平和について深く考えるきっかけにもなった。

そもそもの話、「平和」とは、戦争がなくお互いが助け合いをしていくことだと思う。

私は、そこでなぜ戦争が起こるのかを考えてみた。そして、領土やものなどの奪い合いや、それぞれの国の文化や宗教、考え方の違いから始まったことだと私は考えた。

それでは、どうしたら奪い合いがなくなるのか、まず考えた。個人的な考えとしては、お互いが有益になるように、協力し合える社会を築くことが大切だと思った。たとえば、そこでとれる資源や食料などをお互いにとって有益であるような取り引きをすることが奪い合いをなくすことにつながると思う。

次に、国での文化や宗教など考え方の違いについて、私は考えてみた。そこで、日常の小さなことに注目したとき、私はふと思い至った。たとえば、誰かと自分の意見が食い違ったとして、もちろん自分の意見を曲げないということは大切ではあるが、どちらとも貫き通せば、争うことになってしまう。こういった小さな争い事で、揉めるとしても、私としてはこれが、「小さな」戦争に値すると思える。このような小さな争いが、国同士などの大きな揉め事になれば戦争になる可能性があるだろう。だから、自分の意見も言ううえで、相手の意見も聞いて、お互いに歩み寄るなど、どちらともが公平になるようにすることの方が大切だと思う。

今の話の中で言ったことも平和につながるために、重要なことであるが、世界全体が良くなるためには、一人一人が、ボランティアの意識を持ったり、積極的にリサイクルや物資の寄付をすることも、世界全体の平和、全員が平等である関係をつくることにつながると思う。

だからこそ、世界全体が平和のために動いてほしいと私は強く願っている。

何でもない、普通なこと

暁秀中等部　三年
小野　華

今年で、終戦七十四年。八月十五日、終戦の日の新聞には、戦争に関する様々な記事が載っていました。その中で一つ、目に止まる記事がありました。「戦没者の妻」の一人である女性の記事です。

その女性は、八月十五日に日本武道館で開かれた戦没者追悼式に参加していました。女性の夫は出征後、敵に胸を撃ち抜かれ、命は取り留めたものの、肺の機能障害が後遺症として残ってしまったといいます。結果、その夫は肺の病気で亡くなってしまいました。

その布団の下から出てきたというメモにはこう認(したた)められていたそうです。

「普通に暮らしたい。」

戦争は、この何でもない願いさえも奪ってしまいました。戦争によって、家族の団欒(らん)が奪われてしまったのです。このことは、今、平和の中で当たり前に生きている私たちには想像できないことでしょう。国語の授業で読んだ戦争中を描いた物語も、感動することはあっても、恐怖の感情の共感はできないこともあります。

もちろん、今私たちが生きている日常にも、友達と喧嘩したり、テストの結果が悪かったりと、事件はあります。しかし、いきなり家族の一人がいなくなってしまうことは、一般的には起こらないと言えます。病気などで亡くなってしまうこともあるかと思いますが、「出征」という理不尽な理由では、普通家族は奪われません。

私の祖父は戦時中、十代前半だったと言っていたと思います。私と同じくらいの歳の時、空襲によって死んでしまった人々の遺体を熊手のようなものでかき集め、遺体の「山」を作る仕事をやらされたそうです。空襲が来て、仲間と一緒に無我夢中で川の中に逃げ込んだら、その仲間が川に浮かんで死んでいた、という話も聞きました。

祖父は私と同じ十四、五歳の時、そんな壮絶な体験をしました。しかし、戦争の無い「平和」な中に生きている私たちは、例えばニュースで大規模な事故の映像が流れた時、遺体にモザイクがかけられて、ショッキングな映像は見ることがありません。私たちは守られているのです。しかし、祖父の頃には守られていなかったのです。守る余裕がなかったとも言えるでしょう。祖父のような子どもが駆り出されたのは、出征により大人の男の人が不足していたから。

私の周りに戦争体験者は祖父しかいませんが、一人の話を聞くだけで戦争の悲惨さが伝わってきました。祖父は、周りのたくさんの人を奪った戦争を、心から恨んでいるようでした。

新聞の記事や、数年前に祖父から聞いた話から、戦争はもう二度と起こってほしくないと思います。私は、今生きているこの日常で、友

達とくだらない話をしたり、家族と食卓を囲んで、楽しく夕食を食べたいと思います。

それは、新聞記事に載っていた女性の夫の願いと同じです。「普通に暮らしたい」というのは、全ての時代の人の、共通の願いなのではないでしょうか。ほとんど全ての人が願う平和という「何でもない」「普通のこと」を奪う戦争。その国の利益になるから始めてしまうのでしょうが、その代償も大きいです。私たちの「幸せ」は「何もないこと」だと私は思います。

今、世界では内戦の激しい国もあります。私たちがその国の、いつ死が襲ってくるか分からない、怯えた人々を救うにはどうしたらいいでしょう。まだ解決には至っていませんが、私たちができることも、きっとあるはずです。

二度とあってはならないこと

暁秀中等部　三年
三浦　梨央

（早く日本に帰りたい……）これは、私の曾祖母が戦時中、満州国に居た際にずっと願っていたことだそうです。太平洋戦争中、曾祖父は満州国で戦うよう指示されていました。戦時中以上に辛かったのは、戦後だったようで、

「八月十五日の終戦からが、地獄だった。」

と言います。十八歳以上六十歳未満の男性はソ連の兵隊に連れて行かれ、厳しい強制労働をさせられたようです。また、残された子供と女性の家には、毎日ソ連の兵隊が来て、持っている物を片っ端からどんどん盗んでいったそうです。すぐに荷物を出さないと、鉄砲で撃たれてしまうので、必死に荷物を渡した話をしてくれました。曾祖母は、女性に見られると弱く見られるので、墨で顔を黒くしたり、髪型を丸刈りにして男に見えるように工夫したとも言っていました。

このような残酷でひどい話を曾祖母から聞き、終戦後も、ある意味戦争が続いていたのかと驚きました。私たちは今、何の不自由もなく、物を食べたり買ったり、好きなことをして豊かに暮らしています。でもそれは、平和だから出来る事なのです。

私は二度と戦争を起こさないために、自分に出来ることはないだろうかと真剣に考えてみました。

一つめは、戦争の残酷さ、恐ろしさを伝えていくことです。曾祖母は今年九十七歳になります。終戦から七十四年が経ち、戦争経験がある方々が、どんどん少なくなってきました。だから、私を含め、戦争は怖いものだと何となく勉強して知っていても、詳しいことを知らない人が大半だと思います。だからこそ、戦争について生の声を聞くことが大事になってくるのではないでしょうか。私は幸運にも、曾祖母に戦時中や戦後の話を直接聞けたので、多くの人にこの悲惨さを伝えていきたいと思います。

二つめは、自分勝手な考え方をしないということです。今、世界中

には戦争をしている国々があります。人種や宗教の違いからの紛争も数多くニュースで目にします。それを他の国のことだから……という視点で見てはいけないと思います。今、日本と韓国が貿易のことで意見が対立し、重大な社会問題になっています。これは両国共に、自分の国のことを中心に考えていて、相手の国のことまで考えていないからではないでしょうか。平和な世の中にしていく、つまり争いごとを無くしていくためには、相手の立場に立って物事を考える視点も重要になってくるのだと思います。互いの国の事を理解し、良い面を共有できたらと思います。

三つめは、命の大切さについて考えるということです。戦争中は広島と長崎に原爆を落とされ、合計三十五万人の尊い命が一瞬にして奪われました。更に、被爆者を含めるとそれ以上になります。その方たちの苦しみ・辛さは私たちの想像以上であることを、本から知りました。命より大切なものはありません。親からもらった尊い命の重みを、一人一人が感じて、二度と戦争を起こさない社会を作っていくことが大事だと思いました。

曾祖母は、戦時中や戦後の事を思い出したくないと言っていました。でも、その辛い思いを持ちつつ、私に話をしてくれました。七十四年前の戦争の悲劇を、二度と繰り返してはいけないと、曾祖母の悲しそうに当時を話す姿を見て、改めて感じています。被爆者の方は、今もなお身体が不自由だったり、その子供が大人になって赤ちゃんが奇形児で生まれるのではないかと不安に怯える日々であったことも、曾祖母から聞きました。戦後七十四年経っても、その苦しみから逃れられない人がいることを、私たちは忘れてはならないと思います。

私たち中学生に出来ることは小さいことかも知れません。でも、何が出来るかを考え平和でいることの大切さを考えることが未来を拓く自分たちの使命であると思います。